
フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

神淨討魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリー・テイル 神の滅竜魔導士

【NZコード】

N8326Y

【作者名】

神淨討魔

【あらすじ】

リアルで死んでしまった少年が名前を変え、姿を変え、そして火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等を操る滅竜魔導士になつてフェアリー・テイルに蘇る。そして、おなじみのキャラと大暴れします。多分…

オリジナル主人公紹介

名前

ディオス・ドラグニル

名称

ディオス

年齢

現在16歳　FT加入の時は9歳

性別

男

好きなもの

ギルドの仲間

嫌いなもの

ギルドの仲間を傷つける者

(特に女子供を傷つける奴は絶対に許さない)

魔法

神の滅竜魔法

火、水、風、土、氷、雷、毒、天、光、闇

などいろいろな元素操る最強の滅竜魔導士。

プロローグ

起き……

「ん……」

起き……

「わはは……もつもつと寝かして……」

起きなセー！

バチ！」——！

「へあつーー？」

オレは何者かに叩かれて起き上った。

「あれ……？ オレは……！」は……？」

オレは今、真っ暗闇の中に横になっていた。

「もつやつと起きたのねー！」

とすぐ横に小さな子供……らしき者がいた。

背中には羽が生えている。

なるほど、これは夢の中なんだと思い、もうひと眠り

しようと目を瞑つた時、また叩かれた。

「痛いなあ……人の頭を太鼓みたいに叩かないでよ……」

少し涙目になりながら反論する。

「まつたぐ、死人が寝るなんて聞いたことないわよ……」

「はいはい……好きだけおっしゃって……って、え?」

「今なんて……言つた……オレが……死んだ?」

「オ……オレは死んだ……のか?」

目の前に立つる羽の生えた少女に聞くと

「そうですよ~」

「とものすい」^{のんき}へ呑氣に答えた。

いやいや、そんな呑氣に言われても……

その時、頭に痛みが走り、記憶の断片が見えてきた。

11月24日...

オレは普段通りに身支度をし、家を出で学校へと向かっていた…

通学路の途中、少し行き交う車の量が多い道路がある。

その道も普段通り、普通に歩いていた時…

「 キヤーーー！」

突然、悲鳴が聞こえた。

ビックリして声のした方を向くと

小学生くらいの子供が道路にいるのが見えた。

野球をしているのか、どうやら落として道路まで転がった

ボールを取らうとしているようだが、ここは交通量が少し多い所

車を見て、取るタイミングを計っているようだ。

そして、タイミングよく出てボールのところまで行き

ボールを取つて、戻るとした時、足を絡ませてこけてしまった。

しかも、運悪く、車が来ており、ブレーキをかけても間に合わない所だった。

その時、オレは自分の意思とは関係なく動いていた。

道路に飛び出し、体当たりをして少年を道路脇まで吹っ飛ばした。

しかし、無情にも車はもつよけられないといろまで迫つており

「（やべ・・・）」

と思つた時には、視界が一回転した。

チラリと車の影が目に映つた時、意外と小さく感じた…。

そして…そのまま暗闇へと変わり、オレは地面に叩きつけられる

痛みすら感じないまま、闇へと放り込まれた。

（回想終わり）

そうだ、思い出した…。

縁起でもなく道路に飛び出したバカな少年を助けようと

オレも道路に飛び出たんだ…。

そして、そのまま車に吹っ飛ばされ、命を落とした…。

その時、勝手に口が開いていた。

「……オレが助けた少年……無事だったのかな……」

その問いに答える者がすぐ横にいた。

「ええ、あの子は無事よ。その後、病院で検査を受けて、通常通り学校に行つたわ」

……やうか良かつた……って

「おわっ……」

オレは後ずさりした。

まさか答える者がいるとは思わなかつた。

「つわあ……ひどいなそんな反応……あんまりだよ……」

少女は泣きだしてしまつた。

あ~~~~~……「うこう」ときなんて言つたらいいかわからな~……

ので、適当に声をかけた。

「「1」ねん」「ねん~……まさか答えてくれる人いるとは思わなくて……その……」

オレって、やっぱバカか?

「うん！許す！」

許すんかい！

「あ、そういえば自己紹介してなかつたね」

そういえば、そうだな。

「私の名前はリリス。見ての通り、天使の一人よ
そして、羽をピクピクと動かした。

「天使！？初めて見た！」

棒読みで言つた。

「エへへへへ…」

鈍感なのか何なのか、笑みをこぼしたリリス。

よかつた、気づかれてねえ。

そんな時、疑問が浮かんだ。

「じゃあ、リリス、聞きたいんだけどさ」

「ん？ なあに？」

やべえ… 意外と可愛い… じゃなくて！

「リリスは何でオレを起こしたんだ？」

当たり前の疑問だ。死んだなら、そのまま閻魔の所

行って、天国か地獄に行く。

オレの場合、地獄かもな…だから、そんなんじゃなくて！

その時、リリスが答えた。

「ああ～。そういうことね。理由は…」

理由は…

「私の暇つぶしよー」

「（ブツ）」

吹き出した。

「暇つぶしにだれかを蘇らせようと思つてたら、

偶然あなたが来たの。ここにね

『リリ』ところのまおそらく異界かなんかだろう。

とこりか、暇つぶしでそんなことを思いつくアンタがすげえ…

「じゃあ、オレは生き返れるのか?」

期待が少しふくらんだ。

「うん、やうだよ。あ、だけど、現実世界は無理だよ?」

え…なんで…

「だつて、あなたの死体はもう燃やされちゃつてるもん」

なんすと-----?

燃やすの早…?いや…もしかして…

「オレ…そんなに寝てたの…?」

恐る恐る聞いた。

「うん、現実世界だと一週間くらー」

ガ-----ン!

「つて事は何!?オレはそんなに飯食つてなかつたのか!?」

「ははは、そこなのーー?」

ツツ「まれた。

「寝ぼすけだし…食いしん坊だし…大丈夫かなあ!この子…」

「ん? 何か言つた?」

「「ひひん、 何も…」

なんかあやしい…が、 それはそれで

本題へ…

「じゅあ、 蘇らせるハビリティへ…」

「良い所に氣づいてくれましたーー。」

キコペーンハビリティを振り向き蘇らせるリリス。

「つまり、 現実世界はもつ無理だから、 別世界へあなたを

蘇らせる」としたの。 あなたの記憶もすべて新しくしてね

なんですよーー? それはまたまた…

「だから、 この中から行きたい世界を選んでね

とコロスが地面…ひしき所をたたくとまづの

選択肢のようなものが出た。

「これはおなじみだ。」

『ZONE PLACE』

『BLEACH』

ふむふむ。

『FAIRY TAIL』

！？？

オレの指はすぐさま『FAIRY TAIL』の文字を押していく。

「選ぶの早っ！？普通もつと考えない！？」

リリスにまたツッコまれた。

ツッコまれ役だな。

「FHアリーテイルはオレ、リアルで好きだったんだよ。

漫画も全巻買つたし、アニメも全部見た……」

そういえば、最終回見れなかつたな……。

つて、待てよ……FHアリーテイルの世界に行けば最終回とか

丸わかりなつちやうじょん！？というか体験できひつじょん！？！

「とりあえず、FHアリーテイルでいいんだね

「おう！」

「はい、了解。じゃあ、次は名前を決めよつか」

と、また地面にしき所を叩いたリリス。

また文字が浮かんできた。

『ライ』

『シユウ』

『ディオス』

迷わずディオスを押した。

「だから、選ぶのは『「いのち』』……」

ツツ「みを途中で止められた。

「ディオスつて、響き良こじやん。だから『』」

理由を述べた。

「今から、オレは『ディオス・ドラグールだ!』

「えー? なんでドラグール付いてんのー?」

「ナツとオレは兄弟つてこじたかったから

「なるほどですね」

「おい、口調おかしくなつてんだ。

「でも、ナッシェーとは双子の兄つてことにしておあがしまる」

「おお、助かるぜ…。

「顔はナッシェーとほとんど同じで、髪形も同じで色は向色がこいです
か？」

「黒」

ただ単にブラックが好きなだけ。

「はい、完了…」これ鏡です」

と鏡をくれた。どうから出した!?

鏡の中の自分を見ると、一瞬ナッシーに見間違えた。

それほどよく似ていた。髪色さえ違わなければ、

ナッシー全く一緒に

「では、服装なども一緒にしますか?」

「ああ。あ、マフラーの部分は黒いリングみたいのにして。

あとフードの付いてるマントも付けて」

「良いですか…なぜ？」

「最初は顔をバラさずに、後からバラす作戦だ！」

ふざけた作戦だな… つて声までナツと一緒にだ…?

「あ、もう」

200

とその時、服装まで変わった。完璧にナツそっくりだ。

そこで後ろで立たん工があつた。やのさん工を温めに用ひ、

完全に体が隠れるよ」にした

そしてフードを被つてみた。すると、相手からほ

ほとんど口しか見えない様な状態になつた。

不審者だな……。

「ところで、魔法は何使えるんだ？」

フェアリー テイルに行くんだつたら魔法が無きや意味無い。

「はい。神の滅竜魔法を付けました！」

神！？つまり神竜しんりゅうってこと！？

「神竜は火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等のさまざまな元素を含みます。なので、ほとんどの魔法はあなたにはほとんど効きません」

まさに最強じやん！

「いいのか、そこまでしてもらつて…」

「ええ。いいですよ。では準備はこれくらいでよろしいですかね」

「ああ、ありがとうございます」

短くお礼を言つた。

「どういたしまして。それではいってらつしゃい、

『フェアリー妖精テイルの尻尾』の世界へ！」

リリスが最後に手を振つた。

その途端、オレの視界がまた闇に包まれた。

さあーフェアリーテイルの世界へ出発だ！

フェアリー・テイル加入（前書き）

さて、フェアリー・テイルの世界に降り立ちました！

フェアリー・テイル加入

マグノリアの街…フェアリー・テイルのギルド前…

雨が降つていて、冷たい水がオレの体を叩く。

「着いた…ここがフェアリー・テイルって、ギルドか…」

見た目はまだ10歳かそこらの少年がギルドの扉の前に立つていた。

昔の現実世界の記憶など全く無く、フェアリー・テイルがどういう

世界かも知らない状態でこの世界に降り立つた。

少しはある記憶から行くと、オレは1~2年ほど前まで

神竜『マスター・ドラゴン』に育てられ、神の滅竜魔法を覚えた。

ところが、ドラゴンは突如オレの前から姿を消し、オレは途方に暮れていた。

神竜からもった、首の黒いリング…。そのリングの下には

傷があり、それが首をグルッと一回りしている。

そして途方に暮れて旅をしている時、小さな村にあるギルドに

入った。クエストをこなし、お金を貯めている時、変なタマゴを森で見つけた。ギルドの人の了承も得て、温めていると、羽の生えたネコが生まれた。しばらく、付けたる名前を考えている時、このネコが生まれた事で、ギルドに幸運がドンドン舞い込んだので、
『ラツキー』といつ名前を付けた。そして、ラツキーを連れて、その後もクエストを遂行していった。

だが、あるクエストから帰ってきた時、ギルドは火の海となつており、偶然と立ち廻くした。火が収まつて中に入つてみると、『闇ギルド』と名乗る3人ほどのクズ共がいた。死んだ仲間の背中にどつかと座り込み、
「クソ、ここは貧乏ギルドかよ…」
「弱え奴しかいねえもんだな」
「貧乏くじ引いたな」

と、仲間達を侮辱している姿を目にした時、怒りに震えた。

そして、滅竜魔法で3人共、跡形もなく消し飛ばすと、

「『ロジが、てめえらの死に場所だ…』」という台詞を言い放った。

ギルドの燃えた木材などを全て片づけ、遺体を横に置き

地面を碎いて、大きな穴を作った。

その穴に、遺体を入れた。入れている間に、涙が

とめどなく溢れ、止めることができなかつた。

全員を埋葬し終わり、ラッキーと共に、手を合わせ

もくとう
黙祷を捧げた。

ギルドマスターの羽織つていたマントを被つて、また

途方もない旅に出た。

途中で、貯めたお金を使い、飯を食つて、宿に泊まつたりもした。

街まで行けないとときは、そじらへんの魔物を狩つて、野宿した。

途中、ラッキーが風邪を引いたが、必死の看病で治つた。

そして、ある街まで着いた時、宿の人に相談を持ちかけた所、

「マグノリアという街にフェアリー・テイルというギルドがある」

と聞いた。

そして、教わった通り、来てみると、マグノリアといつ街に着き、そして、ギルドを見つけた。

そして今に戻る。

「やつと着いたな…」

「入らないの『ティオス?』

「ん? ああ、そうだな…」

「…やつぱり、前のギルドの」と思いだしてた?」

前のギルド…。オレがいなに間に済されたギルドだ…。

思いだすと、また涙が出てきた…。

「…う…クソ…」

「ティオス…」

そういえば、ラッキーには苦労かけっぱなしだったな…。

早くはいらねえと、また風邪ひいちまつかもしれねえ。

そんな話を終え、ギルドの扉を押した。

ドンチャンドンチャン騒がしいギルドだった。

その中を2・3歩歩いた途端、静まつた。

途中、大人や子供が

「見ない顔だなあ…新入りか?」

「今度はちつたあまともだらうな」

等の声が聞こえた。

そして、カウンターにたどりつき、カウンターに

座つてる老人に声をかけた。

なぜ、カウンターに座つてる?

「すみません、フェアリーテイルというギルドはここでよろしいですか?」

「そりじゃ。お前さんは誰じゃ? ずぶ濡れじゃないか

「お構いなく…。オレはティオスと言います。それで、ここにいるのが…」

マントを少し開けると、ラッキーが顔を出した。

「ラッキーです」

「やー」

ヒラッキーも挨拶した。

「ふむ…ハッピーみたいじゃな…」

「ハッピー？」

「あ、いやいや、何でもない。とにかく前をさせ」に向かって「来
たんじや？」

「もういえば、もうでした。オレ、ここに入りたいのですが大丈夫
ですか？」

「ああ、構わんよ。ここ入りたいう気があつさえすれば入っ
て結構じゃ」

「あっがとうござまわ」

「やうじや、ワシの名前を書つてなかつたの。ワシはこのガルグの
マスター。

マスター・マカロフじや。よろしく頼むぞ」

「はー、よろしくお願ひします」

と握手を交わす。

「ヒーリー、ディオスとや。お前さんは、どんな魔法を使つ

「あ、はい、滅竜魔法を使つます。神の滅竜魔導士です」

「な、何！？」

マスターがいきなりビックリしたので、

オレまでビックリした。

「か……神のドラゴンスレイヤーとな……具体的にはどういったものなのじや？」

「こんな感じですね」

オレは右腕を出して、指先に火、水、風、土、雷を出して、
消した後、拳を鉄にした後戻し、氷を作り、毒で氷を溶かした。そ
して腕を光源体にし

そのあと、闇の力で小さなブラックホールを作つて見せた。

そして、最後に全てを混ぜて、虹のよつな物に包まれた拳を見せた。

全ての元素が渦巻いて出来てゐるため、虹のよつに見える。

「こんな感じです」

とオレは口を開けた。

自分でやつて見て思つがマジックみたいだ…。

そして、マスターはと皿つと、口をあんぐり開けていく。

「ほ…ほとんど金ての魔法じやなこか…おまけ…「お前、すげえーなあー…」

とマスターの話が終わつてないとこりのにほんだ少年がいた。

桜色の髪と、ツツ田。首には鱗のよつなマフラーをして、

チラリと首の右側にキズが見えた。

当たり前のことを聞く。

「あ…君は…」

「オレは、ナシだ。お前、アリーナンスレイヤーなんだつてな

あこせつ短つーへとこつか『よひか』も皿つてねえし…

まあ、いこや。

「ああ、やうだナビ…」

その時、少年の口が一「ヤシ…」となつたよつな気がした。

「オレもアリーナンスレイヤーなんだ…」

悪い予感がしてならない。

「『ティオスつて言つてたな。オレと勝負しろー。』

悪い予感的中…。

「おいナツ。新しく入つたばかりなんだ、そういうのは後にしても
れ」

「その時、見た目からすると12歳あたりだらうか?」

赤い髪をした少女がやつて來た。

「君が新入りの子か。私の名はヒルザ・スカーレット。よろしく頼
む」

ホントに10歳前後なのかといつぱりおもつとした挨拶をしてきた。

「はい、よろしくお願いします」

握手を交わす。

と、今度はナツやオレと同じ年辺りの少年が來た。

…パンツ一丁で。服着よつよ…

「つたぐ、ツリ田野郎。他の奴らにも挨拶をせんよ」

といひながら手を差し伸べてきた。

「オレの名前はグレイ・フルバスターだ。よろしく頼むぜ」

「はい、よろしくお願ひします……それより服着ないんですか？」

「はっ！ しまった！」

なんなんだ……この人は……

そんなことを思いながら手を握る。

その時、ナツが突っかかってきた。

「んだと、タレ田変態野郎！ 言つてくれるじやねえか！」

「あー…やんのかツリ田ー…？」

と突然田の前で喧嘩をはじめてしまった。

仕方ないのでは止めるしかなかった。

「あの、喧嘩！」やめんかあ…」……

バキッ！

ゴッ！

止めようとしたが、エルザが呑き落して止めた。

「まつたくーお前らは少し礼儀をわきまえたらどうだー？」

「もつともで…

その時、エルザの後ろから声がした。

「まったくーお前らは少し礼儀をわきまえたらどうだー？ …ってか？」

アハハハツ、けつさく～ハハツ！」

白い髪をポニーテールにした、へそ出し少女が来た。

いかにも不良少女だ。

「あつ？なんだ貴様？言いたい事があるならハツキリ言えれば良いだ
る？？？へそ出し女！」

え？

「んだと？やんのか」「ハハボコボコにしてやんぞ」「ア～？」

え、え？

「おもしれえエルザ、この前の続きだあ…ボコボコのギタギタにし
てやる！」

「上等だ…!!」ラ、かかつて…」

つて、結局でめえらも喧嘩かあ…!!

「ガリガリ！」

「へそ出しー」

「ブス！」

「アホ！」

「デブー！」

「へそ出しー！」

つて、それにしてもレベル低すぎだろーーー？

それに

「何で誰も止めないのーーー？」

と、答えはすぐに帰つてきた。

「止められるわけ無いよーーーあの一人のケンカは、
ナッヒグレイ以上だぜ？」

ダメだこりゃ…

仕方がない。こつなつたら次こそオレが…

「まあ、二人とも喧嘩ー「邪魔だつー」ふでぶつーーー？」

…返り討ちにあいました。

宙を飛んでるディオスを見て、周りの連中は

いつもの結果だ…といつような田で見ていた。

オレはと黙つと、空中で一回転しながら、着地…

「ハア…つてえな…」

もはや、礼儀も手加減もいらないとわかつた…このギルドは…

周りから「おお…」とざわめいているが、ここはスルー。

「ここが…」

ん?

「てめえらの…」

え?

「死に場所があ…！」

ヒュン…といふ音とともに「!!」とエルザのせばまで行き…

「はあつ…」

ドカッ！

ベキッ！

「「ぐふつ…」」

腹に思い切りパンチを喰らい、吹っ飛んだ一人。

周りの人は目が飛び出るほど驚いている。

「何をする貴様！」

「何すんだてめえ！てめえもボコボコにすんだー！」

つて、起きるの早つ！？

じゃなくて！

「黙れ！ナツとグレイの喧嘩止めた後に自分が喧嘩してどうすんだよ！？」

周りの人が「「「「おおーーーーーーー」と驚いていた。

そんな驚く事なのか？

「「「「おおーーーーーーー」と驚いていた。

「いや、待て！リハ。確かに奴の言つとおりだ…

「エルザ！？」

良かつた…リハはキレてるがエルザは反省して…

「セイで貴様に勝負を挑む！」

…………は？

「そいつは召案だ。こいつをボコボコにして、次にエルザをボコボ

コにしてやる！」

え？

「おひしゃあー！オレも這ひたれ———」

おにナツ

「そりや、ちと面食らうだ…」

グレイまで！？そして服着ろ！

「勝負だ！！『ティオズ』！」

そんなこんでフェアリー・テイルから離れて、マグノリアの海辺へ

そこで、勝負をすることになった。

マスター や周りの人はみんな見に来た。

そんなことはよつも

4対1であります!?

さすがに二レはなした奴!!

「私とミラに一発入れたんだ。これくらい余裕だろ?」

「早く始めようぜえ、早くエルザをボ「ボ」にしてえんだよ」

「燃えてきたぞ……」

「へ」

いやいや、あの時は一人だったから…

つていうか、ミラビンだけエルザをボコボコにしたいんだ？

燃えてきたぞ……つて初めからも燃えてんじやん

そして、なぜ服脱ぐグレイ！？

なぜか、入つて早々の決闘が始まろうとしていた。

「いや、これリンチだー!?

終わり

「つておこ！オレの話が三...」

フェアリー・テイル加入（後書き）

次、ディオス、ナツ、グレイ、エルザ、ミラジエーン

始まります！

ディオス・サンツ&グレイ&エルザ&リリィ・ジョン（前書き）

さて、ついに戦い始まります。

もつと後にしようかと思いましたが、

ここではディオスの正体バラしちゃいます

ディオス・ナツ&グレイ&エルザ&ミリジーン

「それでは、これより、新入りのディオス対ナツ、グレイ、エルザ、ミリジーン

の試合を始める。」

（（（（（マスター・・・・）））））

マスターの呑気な発言に呆れる一同。

「始める！」

マスターの号令によつて試合が始まった。

オレからすると、リンチにしか見えないが…

「「「「行くぞっ！ ディオス！」」」

4人いつぺんにかかつてきたし！？

「換装！ 天輪の鎧！」

エルザの鎧がはがれ（なんかエロいし！？）、セクシー！？

な鎧に変わつた。

「全身ティクトオーバー、サタンソウル！」

リリジーンの頭の上に魔法陣ができる、体に変化が起きていった。

尻尾が生え、服は露出度半端ない服装になり、腕は魔物の腕のよひこ

なり、右田にヒビのよつなものができる、髪も逆立つた。

完全に魔物そのものだ… つてサタンソウルつて訳せば

『魔魔の魂』だからな… 当たり前か。

ナツはと詫ひと、息を吸い込んでいる。ブレスでもやるのか？

まあ、エルザやリリジーンに比べれば魔力は低いので

あまり、気にしない。

グレイは左手の平に右手の拳を重ね… 魔力を溜めている。

何をするのだらう… そして、服着るよ…？

「舞え剣たちよ…」

エルザに目を戻すと、体の周りに多数の武器を同時に操ることができるのらしい。

「循環の剣！」

多数の剣が旋回しながら襲ってきた。

「ダークネス…ストリーム…！」

ミラジューンは、と、腕から、闇の腕の様な物を放つた。

あたれば、それなりに痛いだろう。

「火竜の…咆哮…！」

ナツは、先ほどまで吸いこんでいた息を止め、
ブレスを放つた。

なるほど、火の滅竜魔導士か。

「アイスマスク…ランス槍騎兵…！」

グレイは、氷の槍を5～6本放つてきた。

刺されば…痛いだろうな。当たり前か。

4人の必殺技にも近い、あの技を喰らつたら

ひとたまりもないだろう。

少し、驚かせてやるか…。

つま先でトントンッと地面を叩くと、魔法陣が生まれた。

「…・神速…・・・」

4人の技が当たる直前に、一瞬で移動した。

卷之二

4人とも何が起きたか分かっていないようだつた。

オレは、ナツの背後にヒュン！と現れ、右手に魔力を集中させた。大気が圧縮されるかのように右手に集まり、旋回する空気が生まれた。

天竜の

いきなり、背後から聞こえた声に、ビクッと反応したナツだったが、

少し遅かつたな。

鉄拳！」

トレスシ

と振り向いたナツの腹に思いつき、さりとて叫びこんだ

その時
オレの拳を包んでいた
旋回する空気が

ナツの体を回転させた

「うああああああああああー?」

そして、ナツは回転しながら吹っ飛んだ。

見ていて思うが、コッチまで田が回りそうだ。

ドザアアツーとナツは砂浜の上を転げまわっていた。

「いつの間に、ナツの背後につけー？」

エルザが驚愕の声をもたらす。

まあ、マツハに似た速度で4人の術を避け、
ナツの背後に滑り込んだわけだからな。

動体視力が余程でない限り、目で追いかけるのは

困難だろ？

「まずは、1人つてかな？」

オレは軽い口調で言い放った。

その軽い口調が残り3人の怒りを買つたようだ。

「新入りが！ いつまでも調子乗つてんじゃねえ！」

おーお… 悪魔の姿で言われると迫力増すわ…

「だな。 そろそろ本気でいかせてもらおう」

あら… 本気じゃなかつたんだ…

「ツリ田野郎を倒したぐらいでいい氣なるなよ?」

お前の魔力もナシとほんと変わらねえのにな…

じゃあ、オレも本氣見せてやるかな…

「体質を、火竜と雷竜に変更…」

「…」

バチバチッ…

「…雷炎竜…」

火竜と雷竜を融合させた。

炎に雷が纏う…。

「なんだ、あの炎は…?」

エルザもさすがに驚いているな。

「はつー見せかけだよ、あんなの…」

勢いよくのは良いけど、震えてちゃ迫力無いよヘリジーン…

「ツリ田野郎の炎とは全然魔力の格が違うな…」

そりゃそうだろ、雷も混ざってんだから。

「そろそろ、終わりにしてやるよ……」

オレは声を上げて、息を吸い込んだ。

「「「なめるなあつ！」」「」

相手の3人も全魔力を開放したようだ。

その時、吹っ飛んだナツまで復活した。

ホント、復活すんの早いな、このギルドの連中……

「へ、ドリラ」「ンスレイヤー同士、ビツチが上か……」じじで決めるぜー……

威勢のいいこと言つてるけど、フランフランじやん！

「天輪……」

「ソウル……」

「アイス……」

「右手の炎と左手の炎、合わせて……火竜の……」

「雷炎竜の……」

それぞれが、最大級の技を出そつとしているのが、魔力を感じただけでわかる。

さて、どっちが上かな？

「^{ブルーメンガラッシュ}
燎乱の剣！！」

一瞬でオレの背後まで来たエルザが（見えなかつた…）すり抜けざまに

無数の剣をあびせた。そして、ガックリと膝をついた。魔力切れのようだ。

「イクスティクター！！」

両手の間にできた闇の球から波動を放つたミラジエーン。

「キャノン！」

両手に氷でできた大砲を作り、ぶつ放したグレイ。

「煌炎！」

両手の炎を合わせて作った炎弾を放つたナツ。

「咆哮！…」

そして、オレは特大の雷付きの炎のブレスを放つた。

剣、闇の波動、氷の弾、大炎弾、雷炎ブレスがぶつかりあつた。

「（くつ…）」

さすがに、数が違うため、少しコツチが押されている。

少しずつだが、相手の術がプレスを押しのけ迫つてくる。

だが

負けられねえ！たった4人に負けていたら、またオレは

仲間を失つちまうかもしけねえ：

あの経験は……一度だけで……十分だ……

そして、気づかぬうちに全魔力を開放していた。

ブレスがさらに大きくなり、4人の術を全て薙ぎ払い、ミラージューン、ナツ、グレイがブレスの直撃を受けた。

そのまま、ブレスは海の上を突き抜け、水しぶきを上げながら、

水平線の彼方まで消えた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

さすがに疲れた…全魔力使いきつちまつた…。

砂浜の上にミラジーン、ナツ、グレイが横たわっていた。

「どうやら、気絶したようだ、ミラジーンは元の姿に戻った。

ナツとグレイも気絶している。

オレの後ろでは、元の鎧の姿に戻って、疲れ果てたエルザがいた。

観客…ギルドの人達は、マスターを含め、口をあんぐり開けて、ただただ

唖然としていた。

そして、正気に戻ると、

「すげえっ！」

「やるなあ、あの新入り！」

「あの4人をやつつけちまいやがった！」

「すげえかつたなあ！今の咆哮！」

「ミラ姉えとエルザが負けた…」

等、声を上げた。

その時、後ろからエルザが近付いてきた。

「ハア…参った…私たちの負けだ…」

と言い、手を差し伸べてきた。

その手を掴むと無理やり起された。

どういこんな力あるんだ？

すると、氣絶していた3人も来た。

だから、復活早々よ！？

「ボコボコにしてやるかと思つたら、反対に

ボコボコにされちました…」

なんか、ごめんなさい…

「くつそー、何だよ最後の攻撃！有りかよ！？」

有りなんだよ。

「オレがツリ田とエルザ以外で初めて負けた…

すまんな。

「勝者！新入り、ディオス！」

「「「「「おおお————！」」」」」

マスターがオレが勝利したことを宣言すると、

「うう」、声が大きくなつた。

「今度、もう一回勝負しろ！次はぜつてえボロボロにしてやる。」

「私もだ。次は絶対に負けはせん！」

「おっしゃーー！ティオス、せつてえ越えてやつからなー！」

「ソコ三つや、無理だ」

「んだと、タレ田野郎！」

「てめえ、一番最初にぶつ飛ばされてんじゃねえか！」

「でも、起きあがつただろー！」

「少し気絶してたじやねえか！」

またかよ…ナツ、グレイ…。

そんなことを思つてゐた時…

ギルドの集団の中から、オレに向けて何かが飛んできた。

戦闘で疲れていたため、気づくのが遅く、直撃を受けた。

バチイツ…！

…雷…？

神竜だから、雷は効かないが、不意打ちとは何事だ…。

その時、マントが破けてしまったことに気が付いた。

せばっ…！

周囲では、

「何だ今？」

「雷か？」

「つてことはアイツじやねえのか？」

等の声が上がっているが、オレはそれどじやねえ。

そして、煙が晴れ、オレの素顔がさらされた。

その途端…

マスター、ナツ、グレイ、エルザ、ミラジューを含め、

ギルド全員のアゴが地面にガン！と落ちた。

いやいや…そんなに驚かなくとも…って言つ方が無理か。

ナツと同じ髪型だが、髪の色は黒、そして顔はナツと全く変わらない。

首はマフラーではなく、黒いリングが光っていて、服装は上半身は露出度がはげしい

服で、ズボンは膝ら辺でヒモで縛られており、色は黒、そして、腰にベルトでマントの様な

「レも黒色。」ものが固定されており、そのマントは左足の膝辺迄まで覆つてゐる。

だが、服装よりも、みんなの目はオレの顔に釘づけになつていた。

そして、その途端：

と、マグノリア全体に響きそうな声が轟いた。

「ナシ...ジヤヌベヌナ

「いや、ナツはナリに立てるからナツじやねえだろ。」

「だからって、似すぎだ！ 分身みたいじゃねえか！」

「服装力」**コ**い**い**・・

תְּמִימָנָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה

と、なんか口上トまで喋わつた声が聞こえてきた。

そして、話が止むと、みんな、また口からを向や…

「お前、何者なんだよー?」

と同時に聞いてきた……」今まで声揃つことは稀だよな……。

オレは少し考え… 声を上げた。

「…言わなきゃダメですか？」

苦笑にしながら誰かがおおいでるよ、ホレ――

全員同時にツツ 口みが来た。よく声揃うね?... そ...じやないか

なんだか、ギルドに入つて早々……ややこしくなつてしまつたなあ……

と思ひながら、心中では面白がつているティオスだつた。

ディオス・sナツ&グレイ&エルザ&ミリジーン（後書き）

次、ディオスの正体を詳しく（※分）書いていきます！

正体明かすの早くてすみません。

トイオスの正体ー? (前書き)

さて、正体をジャンジャン書きたこと無こます。 (笑)

ナシヒソックリなトイオスの正体は…

ティオスの正体ー?

「やつぱりなあ…」

オレが、どう説明しようか考へている時、集団の中から声が聞こえた。

そして、周りの人をどかしながら、その男が出てきた。

金髪で、なんか針みたいのが付いたヘッドホンをしており、

右目には稻妻のような切り傷がある。

「ラクサス…」

マスターが声を上げた。

どうやらラクサスと呼んでるらしい。右目の傷が稻妻のような形をして

いるから、おそらく、先ほどの電撃はこの男の仕業だら…。

「ラクサス、『やつぱり』ところのはどうしてじや?」

マスターが問い合わせる。

「つたく、じじい共は氣づかなかつたのかよ…?」コイツの声が

ナツヒソックリだつたつてことによお?」

ヘッ ドホンしながら声がよく聞こえるな...

「…………」言われてみれば……

言われて氣づくんかい！？

「で、てめえらの後を」少しつけさせてもらって、隙を見て、オレが攻撃したのさ…

もちろんマントをはがすためにな...

ホントかよ……、喰らつてみて思うが、手加減とか感じなかつたぞ。

「おめえ、ナツのクローンか何かか？」

クローネで… じゃたらせに悪い当たるんだ?

「違う違う。ケローランでも何でもないよ。ただ単に……」

たた単に……？」

周りの人気が耳を傾ける。

「ナツの双子の兄ってだけの話だよ」

双子

だから、ビックリしそうだろ… それに声揃いすぎ。

「うー、お前、アーリアに会つてられたんだろー? なんでも、

弟がいるなんてこと知つてんだよ！？」

追求してきた…。

「オレの親…神竜^{マスター・ドラゴン}は特殊な能力をいくつも持つていてるんだ。…

その目で人を見ただけで、その人の血のつながりとか全部見えちまう。だから、

オレが7歳くらいになつた時に、突然教えてくれたんだ…。オレに双子の弟がいるって

事を…」

「「「「「おおー…」」」」

「こ、意外と驚かないんかい！？」

「だから、オレは、神竜がいなくなつた後、途方もない旅をするついでに

弟を探そうと思つたんだ。それで、マグノリアにオレにソックリなやつがいるって

聞いて、ここに来たんだ。それで、見つけたのが…」

オレはナツの方を向き…指差した。

「ナツだ」

「なるほどね……」

マスターが口を開けた。

「じゃが、なぜ、マントで顔を隠した?」

そして、問い合わせてきた。

「これなり、同じ顔の奴が来たら、ビックリしちまうだろ?だから、ここに入つて、

しばらく顔を隠しながら過ごして、慣れてきたころ、姿を明かそうと思つていたんだ」

オレは、今度はラクサスの方を見ると

「その計画のつもりが、不意打ちによつてパーだよ」

と、うなづと怒り混じの声で言つた。

少し、ラクサスが後ずさつた。

してやつたり……

「とうわけです。マスター」

「ふむふむ……事情はよくわかつた……。つまり前さんの前まへ……」

「ティオス……ドラグールです」

ついに実名明かしちまつたー…

チラリとナツの方を見ると、まだアゴが地面についていた。

いいかげん戻れよ…

「とりあえず、ティオス！ よろしくのう！」

つて、話終わりー？

すると、みんなも少しづつ笑みが戻つていった。

と、突然ナツが声を上げた。

つて戻つたんだ、お前…

「まさか、オレにこんな兄がいるなんて…」

おー、『こんな』つてどうこいつ意味ー？

「なあ、ディオス…」

て、呼び捨てー？ 兄をー？ まあ、同じ歳だからいつか…

「その服つてどーで買つたんだ？」

「「「「「『詫う所そこかよー』」」」

オレ、グレイ、エルザ、ミラジーノンがシッコんだ。

「この服、そんなにいいのか？」

その時、白い髪をしたナツと同じ歳くらいの少女がやつてきた。

「ナツが増えた一つと思つてビックリしかけやつたよー……」

「めんなさい……

つて、君、誰！？

「リサーナ、アンタも来てたのか！？」

突然、ミラージューンが声を上げた。

ん？よく見ると、この一人似てね？

「リサーナ、どう行つてたのか心配したぞ！？」

と、今度は、10歳前後の学ラン来た白い髪をした少年がやつてきた。

「白い髪多いな……このギルド……

つて、待て……マイツもギリとなくミラージューンに似てこねよつた……

「あ……あの……この2人は……？」

恐る恐る聞いてみた。

それにエルザが答えた。

「ああ、この3人は兄妹なんだ。1番上がミラ、2番目がエルフマン、

そして3番目がリサーナだ」

なんど、兄妹だったの！？

どうつで似ているわけだ…

すると、エルフマンと言われた少年が挨拶にきた。

「やあ、僕の名前エルフマンって言つただ。よひじへ…」

変わった名前だな…と思いつながら握手を交わした。

しかも体格ですか！？

すると、今度はリサーナと呼ばれた少女が来た。

「私の名前、リサーナって言つ的一よひじくねー」

元気いっぱいだな…と握手を交わす…。

「ホントにナツそつくりだね…アナタもかわいいかもー。」

……………
へ？

「おー、リサーナ…も、つて言つてほひー」

あのナツが震えている！？

「 もうらん、ナツも含むに決まってるじやん！」

サディストか…？

そんなことを思つていながら、その様子を見ていた。

すると、話が終わつたのか、何なのか、横にいたエルザ、グレイもオレの前に来て、

他の人たちも集まつてきた。

なに・・なに！？オレなにそれちやうわけ！？

と黙つてこると、

「 「 「 「 「 「 とりあえず… フュアリー テイルによつて…」」

と言われ、いきなり、囲まれた。

そして、体を持ち上げられて…

「 「 「 「 「 わあっしょい！ わあっしょい！ わあっしょい！…」」

「 「

と胴上げされた…。なぜ…？

「まつさか、このギルドに2人目のドラゴンスレイヤーが来るとは
な……」

なるほど……、滅竜魔法は現在のように簡単に覚えられる魔法とは違
うんだ……

何せ、太古の魔トシシヨント法スペルとまで言われて居しな……

そんな、めずらしい魔法を持つた人が、また1人増えたんだから、
うれしくなるのも

無理はない……

その時、胴上げの最中に、みんなが一斉に離れた。

つて……おこ……このままじゃ、オレ……

またもや、悪い予感的中で……

デシャー——ン——と地面に叩きつけられた……

地味に痛い……

「な……何するんだよお……」

少し涙田になつて言つたと、リラジーンとコサーナが口をあわせて
言った。

「「やつぱ、かわいい……」」

やつぱりサディストでした——！！

そこに、ラッキーが来た。

つて、お前、どういたんだ？

「やうー、ティオスー……もつべられないとよお……」

二二

すると、この猫を追いかけてたのか何なのが、分からん人か来た。

「やつと追いついた！」の食い逃げ猫！」

なんですか！？

「あ！アンタ、この猫の飼い主かい！？」

飲食面の選択がどうだ?

この二つの展開はまさか……

「このバカ猫が食った食べ物の代金！払ってくれるんでしょうな！」

と何かの紙を渡された……。

ナツ、グレイ、エルザ、ミラ、リサーナも一緒に覗き込むと…

.....

價目... 24000...

ラッキー！お前どんだけ食つたんだ！？

その狂人はどうやら、オレの腕の中でケーラスかいひきかしてやがる……

周りの人は腹を抱えて大爆笑していて、店主はものすげえ怒っている。

やつぱり、オレって悪い予感しか的中しないのか――――――?

「お、クソネン……お前の名前『アンラツキ』です」

そんなこんなで、お金はきつひとつ払つて謝つて、爆笑しているみん

なを鎮めるのに

時間を大幅に費やした…。（ギルドへの帰り道、ミラとコサーナは
まだ笑っていたが…）

入った早々、恐ろしい目に会つたけど…これから先、大丈夫なのか
…オレは？

ティオスの正体！？（後書き）

ようやく、終わりました。次の話は、これから2年後の話です。
ギルダーツが出てきます。
お楽しみに！

ギルダーツ（前書き）

さて、ギルダーツが、ついに登場します……って
まだ、ナツとかリサーナが子供の頃だよ？

ギルダーツ

フェアリー・テイルに入った早々、いろんな事あつたけど、

あれから2年が経過した。今のオレは11歳。

言わなくても分かるかも知れんが、ナツも11歳だ。双子だからな。

それなりに身長も伸びたが、魔力の方もだいぶ上がった。

度々、ナツに喧嘩を挑まれるが、いつも勝ってる。

グレイ、エルザ、ミラ、リサーナ、エルフマンも時々、

喧嘩の見学してるが、最初から分かりきっているかのような目で

見ている。

そして、今も喧嘩の真っ最中だ。

「はあつー・やあつー・たあつー・えいつー。」

両手に炎を纏わせ、いろんな方向から攻撃してくる。

オレはとまどい、片手で全部はじいて、攻撃する隙を探してくる。

「ナツは懲りないな。いくら攻撃しても、あれじゃ勝負にするなつていないで」

エルザが呆れている。

その時、ナツが少し疲れてきたのか、攻撃が遅くなつた。

そして、バランスを崩した。

オレは拳を鉄にして、氷で包んだ。その周りを火、水、風、土、光、闇、雷が纏う。

「神竜の鉄拳！」

「バキイツ！！

そして、思いつきり顔面にお見舞いした。

「ぶふつー！」

ナツが宙を舞つて吹つ飛び。

ズザアアツ…

そのまま床の上を転がつた。

そして、動かなくなつた。

一発で氣絶かい…

「また、ツリ田の負けか。これで何回田だ？」

グレイが声を上げた。まず、服着ようぜ…？

「たぶん、100回越えてるよ…」

リサーナがそれに答えた。

と、その時…

「ゴーン、ゴーン…

突然、鐘が鳴った。

それにしても、変な鳴らし方だ。何事だ？

と、突然、ギルドの中が騒がしくなってきた。

「！」の鐘の鳴らし方つて…

「ああ、帰つてきたな…」

なにが？

その時、ギルドの扉を開けて、メンバーの一人が叫んだ。

「ギルダーツが帰つてきたあ…！」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

なに…？ギルダーツって誰…？

それに、この騒ぎ様は何…？

その時、外の方から変な音が聞こえた。

ボゴン…バガツ…ベコオ…

徐々に大きくなつていく…何この壊れるような音?

その時

「おやじの奴…またか…」

だから、何が!?

我慢の限界で、聞いてみた。

「あの、ギルダーツ…誰ですか?それに、この音はいつたい…
それにハッピーが答えた。

「あい…このギルド最強の男候補だよ!…

なに…? フェアリー・テイル最強の男だと!…

「で、今、聞こえてこるのはギルダーツのせいなんだ」

「え? いつたい、何やつてんの? 帰つてくるだけで?」

それに今度はエルザが答えた。

「ああ、ギルダーツは『粉碎』という魔法を使うんだ

「クラッショ?」

「物を粉々にする魔法さ。だが……その魔法のせいであつと問題が起きるんだ」

「問題？」

からか、聞くと、今度はリラが答えた。

「あのオヤジは、ぼーっとして歩くことが多くてな。そのせいで、民家をクラッシュで

突き破つて来ちまつんだよ。で、今の音は、その民家の壁を突き破る音さ」

えええええ！？ すげえ、魔法だけど、魔法使う本人どんだけバカなんだよ！？

その時、ギルドの門に大きな影が現れた。

「…………ふう…………疲れた、疲れた」

「…………おかえりー、ギルダーツ！…………」

「うわ、すげえ、はしゃぎやつ……」

「ギルダーツ！ オレと勝負しろーー！」

その時、ナツが吠えた。

つて、いつ起きたお前！？

「なんだ、ナツか。オレは仕事から帰ってきたばっかなんだ少しは
ゆっくり……」

「いくぞおー火竜の鉄……」

ボゴオツ！

「けえええええええええええん…………」

ギルダーツのカウンターのパンチを受けたナツは、
ギルドの天井を突き破つて、山の彼方へ消えて行った。

「…………」

思わず、畠然としてしまった

どんな腕力してるんだよ！？

その時、ギルダーツがオレの姿に気づいた。

つて、遅つ！？

「…………え？…ナツー？オレをつかぶつ飛ばしたような…………」

ナツの飛んで行つた方と、オレを交互に見ながら戸惑つていた。

なので、自己紹介することにした。

「あ、オレはナツの双子の兄…ティオスです…でも、よろしく…」

やべえ、力チコチなつちまつた…

「なにいいいいいいいい…！…？…？」

ギルダーツのアゴガクンと落ちた。

オレの正体を知った時のギルド全員の顔と全く一緒だ。

すると、オレの肩を掴んでゆすつてきた。

「ナツの兄…？」アイツ、兄なんていたのか！？それにしちゃ

ナツみてえな暴れん坊にや見えんが…」

オレって、ナツと同じように見られてたわけー！？

なんか、ショックー…！

「ナツと一緒にするなー！」

と、いつの間にかツツコんでいた。

「いやあ…驚いた…今まで一番驚いたかもなあ…」

そりや、どうも…

「まあ、とりあえず、…名前なんだつけ？」

忘れるの早つ…？

「ディオスだよ、ギルダーツ」

ハッピーが教えた。

「やうだそだ、ディオスだ。オレはギルダーツ。コイツ等にや、オヤジとか

言われている。とりあえず、よろしくな」

確かに、他の人と比べると年長者だしな……オヤジって言われる理由が分かるかも……

「はい、よろしく……」

と、手を握った。

……硬つ！？ それも力入れすぎやつて！ 痛いつてのー！

手を離すと、ジーンとしていた……

「ナツの兄つてんなら、大歓迎だ。家にも遊びに来い。ナツみたいに

勝負してやつてもいいぞ？」

「ぜひ、行きますー！ 勝負は……結構です……」

さつきの見たら、勝負なんてしたくねえ……

「やうか」

ギルダーツは短く返事すると

「そういえば、マスター」

マスターの方を向いた。

「ん? なんじや、ギルダーツ」

「そもそも、S級の昇格試験の時期、じやねえか?」

え? S級の昇格試験? なにそれ?

「おお、そうじやつた、そうじやつた」

言られて氣づくのー? ?

「そもそも、S級昇格試験に出る者の名を言わなければな」

マスターはギルドの奥の方に入つていった。

S級、昇格試験といつも葉の意味が分からなかつたので、エルザに聞いてみた。

「エルザ、S級昇格試験つてなに?」

「ああ、そういえば、ディオスには話してなかつたな

「S級昇格試験といつもは、S級魔導士になるための試験だ。毎年1回あつて、

マスターが各自の力、心、魂等を見極め参加者を決めるんだ。その試練には1人しか

クリアできないが、クリアするとS級魔導士というのになり、そのギルドの

主力メンバーの証である。そして、S級クエストという、今、私やディオスが

やつてるクエストとは比べ物にならない位の難易度が高いクエストを受ける

様になるんだ」「

「へえ～～～～～」

すげえ！とオレは心底驚いた。

うわ～、出でえなあ～

と思つていると、マスターが戻つて、カウンターの上に飛び上がつた。

「では、これより～S級昇格試験の参加者の名前を発表する～～」

「～～～～～おお～～～～～～～～～」

ギルドの中が、また騒がしくなった。

「ワシは、各々の力、心、魂…を見極めてきた。その中で…今回の
参加者は

3名…！」

3名か…少ないな…

そういうえば、1年」といつて事は、去年、誰がS級なったんだ…？

「エルザ、去年は誰がS級なったんだ？」

思わず、エルザに聞いていた。

「ああ、去年は合格者はいなかつたから、S級になれた者はいなかつた」

なんですよー！？合格者無しつてこともあるわけ！？

そんな時、マスターが参加者の名前を上げた。

「まずは…エルザ・スカーレット…！」

「わ、私が…！？」

「すごいじゃないか！エルザ！」

周りも

「…おおー！」

と言つてゐる。

「2人目は……リリジョン……」

今度はリリー?

「よつやく、来たか……」

なんか、自信満々だなあ……

さて、次は最後だ……

誰が来るかなあ……

「最後は……ディオス・ドラグール……！」

「…………え？」

「…………へ?」「…………」

オレも含めたマスター以外の全員が素つ頓狂な声を上げた。

だが、突如、その顔は、なぜか輝きだし……

「すげえつー！」

「ディオスが選ばれたよ！」

「たしかに、アイツが完了したクエスト、かなりあつたよなあ～」

「ディオス、す」ーー！」

等と声を上げているが、オレはまだ啞然としていた…

「以上で、参加者の発表を終える…あと、今回は…」

そこで、最凶最悪の言葉をマスターは発した。

「ギルダーツが3人の道を塞ぐ…」

「…………なに…………!?」

オレ、エルザ、ミリまで一緒に叫んだ。

「以上じゃー健闘を祈る！」

「ちょっと待て…………！」

「残念だなあ…オレと当たった奴は運が無かつたってことだ。ハハ
ハツ」

当の本人は笑つてやがるし…?

「出場者の3人は試験準備期間の間にパートナーを一人決めときな…

心から信頼できるパートナーをな…」

パートナー…?

だつたら、オレはアイツしかいねえ

クエストに行く時もずっと一緒にいるアツシしかな

後ろの席で、ネコのくせに肉食ってる奴の名前を言つ。

やう！ラッキーも燃えできたな！」

頼もしいぜ

「では、私は……」

エルザは、喧嘩しているナツとグレイの方を見た。

物語か...

「ナシトマト」

「……え？」

グレイと喧嘩を止め、ナツも変な声を上げた。

「よろしく頼むぞ、ナツ」

へえ……めっちゃ信頼してるんだな……

当の本人はめっちゃ嫌がつてるが…

「私はリサーナと組むよ！」

姉妹組みか、意外とコンビネーションとか

おややうだなあ

試験会場はギルドの聖地！天狼島じゃ！！！1週間後、ハルシオン港に集合し

試験会場へ向かう！詳しい内容は移動中に話す！」

そう書いて、マスターはまた奥へ入っていった。

「…」

そう言い、オレとラッキーはギルドを出て行つた。

「ナツ！私たちも修行だ！ビシバシじごいてやる！」

ナツカわいそうに

「リサーナ！特訓すんよ！」

「うん…ミラ姉え！」

この二人は強敵だな…

ギルドに入つて2年でS級昇格試験に選ばれた！
はたして、結果はどうなるのか！？

次の話へ続く…

ギルダーツ（後書き）

次は、S級試験の話を書くよ！
ギルダーツはいつたい、誰と当たるのか！？
楽しみに！

S級魔導士昇格試験！！（前書き）

衝撃の参加者発表から1週間過ぎました！

S級魔導士昇格試験！！

ラッキーと一週間の修行を経て、

ハルジオン港に到着した。

「よつしゃあ……なんか、燃えてきたぞー。」

「ディオス……なんかナツみみたいになつてきてるよ。……」

ラッキーにツツ「まれた。

確かに似てきてるか……？

……やつぱり、なんかショックだー！

そんな会話をしながら、歩いていると、

前方に船が見えてきた……。

「で……」

田が飛び出した。

「「でか――――――!?」」

そう、前方にあつた、フェアリー・テイルの船は
かなり大きかつた。

その船の前には、エルザ＆ナツ、ミリ&リサーナがすでに到着していた。

「ディオス、遅かったな。今日は負けんぞ」

エルザが声をかけてきた。この一週間で魔力がさらに上がってないか？

その横にはナツがいたが… 田の下には隕が出来ていた。

どんな修行したんだよ…

「じつやじ全員集合したよ、じやな」

船の上からマスターの声が聞こえた。

「では、これより試験会場の天狼島に移動する！ 船に乗れ！」

オレ、ラッキー、エルザ、ナツ、ミリ、リサーナは地を蹴つて、

甲板までジャンプした。

船の上はとてもキレイだった。

ホコリひとつ無い…

すると、その時、帆が降り、こよによ出港となつた。

帆にはフェアリー テイルの紋章が描かれていた。

出港してから数時間…

急に暑くなってきた…

ハルジオン港では涼しかったくらいなのだが
どんどん暑くなっていく…

「「あつつか…」「…」

しまいにはオレとラッキーは情けない声を上げていた。

エルザは水着へと換装していた。

ナツはと詠つと…酔つていてそれどころじゃなかつた…

「キモチ…悪…」

「コツチに来ないでくれるか?

ミラとリサーナはいつの間にか水着に着替えていた。

その時、上方からマスターの声が聞こえた。

「天狼島には、かつて妖精がいたと言っていた…」

へえ……そんな噂があるのか……

「そして、フュアリー・テイルの初代マスター……マイビス・ヴァーニリオン

眠る地である……」

なに!? 初代マスターだと……?

名前からすると、女性のようだな……

その時、マスターが姿を現した。

上はフュアリー・テイルの紋章がたくさん入ったハワイアンな服……

下は黒の海パン。そしてサンダル……

「…………何だよ、その服……」「…………

ナツ以外の全員ツツ」「んだ。

「だつて暑いんだもん」

…………まあ、『』もつとも……

「では、これより、一次試験の内容を発表する」

ついに、来たか……試験内容……

「島の岸に煙が立つてゐるのが見えるか?」

言われた通り岸の方を見ると、確かに煙のよつたものが

立つていた。

「まぢは、あそこへ向かつてもうひ

「そこには3つの通路があり、1つの通路には1組しか入ることは
できん」

なるほど…

「3つの通路の内、1つはギルダーツへ向かうルートじゃ

マスターの口が一ヤツつとなつたなんか腹立つ…

「残り2つは途中で合流しており、その合流場所で2組が戦い、

勝つた方が先に進むことができる」

「え…じゃあ、結局は戦いになるのか。

修行の成果を見せる時かな…

「つまり…一次試験の目的は『武力』そして『運』…」

「「「「」(『運』で……)」「」」

ナツ以外、呆然とした。

つまり、ギルダーツと当たった人は運が無かつたと…

1週間前ギルダーツも言つてたつけな...

「まあ始めい……試験開始じゃ……。」

え？

つて、ここ海の上ですが、マスター！？

エルザが聞くと、マスターの口がまた二ヤツつとなつた……

3つのルート…そして…運…そうか…

「ラッキー行くぞ！」

「...」

「へ、先に行つてルートを選ぶんだよー！」

納得したと同時に、ラッキーは能力系『翼』をアビリティ^{けい}エーラ

発動させ、翼を作つた。

「お先に～～～！！」

とオレはラッキーに掴まつて、先に島へ飛んで行つた。

「くつ、ディオス！…ナツ！いかげんに覚めろ！！」

ガン！とナツを蹴つて（ひでえ…）ナツのマフラーを掴んで
海へとダイブ…

「リサーナ！行くよ！」

ミラはサタンソウルを使い翼を生やした。

リサーナはテイクオーバーで鳥になり、二人とも空を飛んだ。

そして、ついに一次試験が始まった。

ラッキーのおかげで一番乗りで島に上陸したディオス…

「なつ…なんだこの島は…？」

着地した途端、オレは驚いた。

島全体からものすごい魔力を感じたからだ。

「すごい魔力だね…ディオス」

ラッキーも感じているらしく、体が震えている。

「…よし、行くぞ…ラッキー！」

「やつ…」

オレとラッシュキーは急いで煙上がっている方向へ向かった。

そして、煙のあとにたどりついた。

マスターの言つていた通り、3つの穴があり、それぞれが通路になつてゐるようだ。

この3つの穴はギルダーツへ続く道…当たりたくなえ！

穴の上には魔法文字で

『A』
『D』
『E』
『B』

と書かれていた…なぜA・D・E?

普通はA・B・Cじゃねえか?

と考えてゐる時、後ろの方から走る音が聞こえた。

びつやー、他の2組も上陸したようだ。

「よしー！Aに行くぞー！」

「えー？ なんでAー？」

「なんとなくだー！」

「えーーーーーー？」

適当に会話を終わらせて、オレは△の通路に入つてこつた。

薄暗い中、進んでいくと、やつと仄くなつた。

「…ギルダーツとか…いなによな…」

ボソリとラッシュキーに聞いてみた。

「分からぬよ…とつあえず少し進んでみよ」

ちつちつと声で会話を終え、

少し、進んでみた。

すると…前方に影が見えた…

まさか…

茶色のブーツ…

黒いズボン…

ボロボロのマント…

口元にはつつかりと鬚が生え…

いくつもの戦いを潜り抜けてきた」と恐ろしきほどの一
気迫に満ちた田…

茶色の髪…

悪い予感は的中した…

「よお…『ディオス…』

「……………」

「運が無かつたなあ…」

「やつ…終わつたあ…」

悪い予感は的中した…だが、なぜか、オレの心はやがて燃えたもつた。完全にナツと一緒になつてしまつたようだ。

「ハツキー…」

「やつ…?」

「おかしいな…なんか、オレ、絶望を微塵も感じじてねえ…」

「え…?」

「胸が高まつてよお…止められねえよ…」

「ディオスが完全にナツ化した…-----」

ラックキーが驚愕してメチャクチャに飛び回った。

「ギルダーツ！…勝負だ…」

「へえ」

少しギルダーツも面食らつたようだ。

ディオスVSフェアリー・テイル最強の男ギルダーツが始まろうとしていた。

S級魔導士昇格試験！！（後書き）

次、ディオス vs ギルダーツです！
そういうば、読まれた回数が1000回超えてました！
ありがとうございます！

ディオス vs ギルダーツ！（前書き）

さて、ディオスの技はどれくらい、ギルダーツに通用するのか！？

ティオス v.s ギルダーツ！

「行くぞ… ギルダーツ…！」

「完全にナツになってるな。ナツと同じ顔で言われると

もう、ナツにしか見えん…」

それを言つた一つ…！

「神速…！」

シコン…！

とこつ音とともに逃えた。

この2年の間に『神速』の速度はさすがに上がり、マッハ3～4に等しい速度になっていた。

「ほう…」

ギルダーツも少し驚いたようだ。

オレは、そのギルダーツの後に移動した。

「（すげえ…後ろ姿だけでも、どんなにもねえ『気迫…』って怖い氣迫…）

る場合

じゃねえな……いぐぜ……（）

「神竜の……」

ギルダーツはまだ後ろを向いている。

「鉄拳……」

と拳を出したが……少し体をひねるだけでかわされてしまった。

だが……まだまだ！

「鉤爪……」ビュッ！

「碎牙……」ヒュン……

「鉄拳……」シユツ……

全部かわされた……完全に遊ばれてる……

「なら……これでどうだ……！」

オレは一回後ろに退き……息を吸い込んだ。

「神竜の……咆哮……」

火、水、風、土の渦巻いたブレスに鉄の刃が混ざり、旋回する風と雷が纏つた。

ナツとは比べ物にならない特大の咆哮だ。

「へえ……さすが……ナツの兄だけの」とはある……少しあやうじやねえか……」

ギルダーツは手を前に出しながら口を開けた。

「神の滅竜魔導士よ……」

その時、オレのブレスが急にバラバラになつた……

オレはとつたに何かヤバイものを感じて、ブレスを止め、高くジャンプした。

すると、オレがさつきまでいた所がバラバラに『分解』した。

「（なんて魔法だよー）」

改めて、ギルダーツの魔法の怖さを思い知る……。

しかも、ブレスまでバラバラにしゃがるなんて……

最強つて言われる理由がわかる。

オレは着地すると、また戦闘態勢を取つた。

ホントに、恐ろしい男だと思つた……

オレはわざわざから動き回つてゐるのに、ギルダーツは

『一步』も動いていない…

「これが最後の攻撃だ…行くぞ…」

また、神速でマッハの速度で移動した。

そしてギルダーツの真正面へ来た。

「えつ…？真正面から行くなんて！何を考えているんだよおディオス！」

ラッキーが何か言つているが、ここはスルー！

「神の名の下に命ずる！全ての竜の力、我が右手に集え！」

オレが唱えると、全ての元素がどこからともなく現れ、上に突きだした

右手に集まつていく…そして全ての元素が渦巻く特大の球が生まれた。

この光景に、先ほどまで笑みを浮かべていたギルダーツの口が開かれた。

「神竜の…！」

ギルダーツがマントを前に構えた。

完全に防御の構えだ。

「轟拳！！」

と同時に特大の球をギルダーツに向けて放った。

ギルダーツの体を包み込み……そして……

ドツゴオオオオオオオオン…………

大爆発が起き、天狼島全体を揺らした。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

全魔力使いきつちまつた……ヘトヘトだ……

ラツキーは爆風で吹つ飛んだが、大丈夫みたいだ。

さて……おそらくギルダーツには直撃したはず……

と煙が晴れるのを待つた。

そして徐々に煙が晴れて行く……

その煙の中に大きな影が出来た。

アレを喰らつて……立つてられるなんて……

ラツキーも驚いていた。

「そんな！アレは『ティオスの全魔力を込めた一撃だつた！！』

それなのに、全然効いてないのか！？」

ギルダーツの羽織つていたボロボロのマントが

さらにボロボロになつた…それだけだつた。

だが、オレはあることに気づいた。

「いや…よく見ろよラッシュキー…」

「え？」

「ギルダーツを…最初の位置から動かしたぞ…」

やべえ…もうフラフラだ…

「もういいえーたしかに！」

そう、ギルダーツは今の一撃で、2メートルほど後方に下がつてい
た。

今まで、どんな攻撃しても動かなかつたのに…

「大したもんだ…ここまでやるとは思わなかつた…」

ギルダーツも少々驚いているようだ…

「だが、やつらが何のようだな

ギクッ……！

「まだだ……まだやれる……」

ダメだ……威勢のいいと宣言してもフランクにじや説得力無いな……

「やっぱ、ナツの兄だ……言ひと全部ソックリじやねえか……」

ギルダーツはそのまま、田を闇じた……

「だが、この世は……そんな勢いだけで突っ走れる世の中じやねえ……」

その時、ギルダーツの足元にある小石が揺れだした。

「お前にもナツにも……オレと同じ魔の道を歩き、その頂にたどり着く為に

足りないものがある……」

ボロボロのマントが浮きあがり、揺れていた小石……いややうへんにあるガレキ

全てが浮きあがる……

「それを知れ……！……」

そしてギルダーツは目を開いた。

その途端、ギルダーツの足元が砕け、ガレキ全てが宙に舞つた。

マント、髪も逆立ち、光が足元から凄まじい勢いで噴き上がる…

そのギルダーツの出す魔力と氣迫を感じた途端…

全身に寒氣が走つた。

「……………！」

もはや、ijiだけじゃなく…島全体が揺れるほど魔力だ。

ビコビコリとオレの体を何かが突き抜ける。

「ぐ…お…おお…！」

オレの足が震えている…？

いや…足だけじゃない…オレの体そのものが震えている…？

「ぐ…」

気持ちを切り替える！

冷静になるんだ…！

「ぐ…お…お…！」

気づけば、オレは突っ走つていた。

拳を構え、突きだそうとした時…

ギルダーツの目がカツツと大きく見開かれた。

その途端…また、体が止まつた。

「あ…ぐ…く…」

全体から冷や汗が噴き出で止まらない…

そして、オレの心を完全に恐怖が支配した時…

ガクツと膝をついた…

その時、ギルダーツの魔力が收まり、上からは浮き上がつたガレキ
が落ちてきた…

マント、髪も元に戻つた。

「…………」

黙つてオレを見下ろしている…視線を感じる…

「ま…参り…ました…」

その声は震えていて、自分でも聞き取りづらかつた…

腕がブルブルと震え…体を支えてられない…

その時、上からギルダーツの声が聞こえた。

「フツ…見事…」

…え…？

「勇気を持つて立ち向かう事をオレは咎めたりはしない…
だが、抜いた剣を鞘に納める勇気を持つ者はことのほか少ない…」

「恐怖は『悪』では無い。恐怖とは己の弱さを知るという事だ…
弱さを知れば、人は強くも優しくもなる。S級になるには必要な
ことだ。」

オレもS級になる時、それを知った。そして…」

「お前も今、ここでそれを知つた…合格だ」

そんな…だけど…

「オレは…ギルダーツに…」

「行けよ。試験官が合格だつて言つてんだ。だが、試験はこれで終
わりじゃねー」

「自信を持て。ナツの兄なんだ。お前ならきっとやれる」

「それと、ここからは試験官としてじゃなく…友人としての話にな
るが…」

「強大な魔力がそいつの全てじゃねえ。だが、超えたいとい
う気持ちはオレにもわかる。歳もキャリアも関係ねえ」

「オレも同じで、お前には負けたくない」

「また、いつでも勝負してやるーS級になつて来いー・ディオス」

ギルダーツの話が終わる直前から、オレの顔はすでに涙で濡れてい
た：

一次試験を『恐怖』を知ったことによつて合格した。

次は何が待ち構えているか分からぬが、絶対にS級になつてやる。

そして、いつか、ギルダーツを超えてやる。

ディオス vs ギルダーツ！（後書き）

さて……ディオス vs ギルダーツ終わりました……
やっぱ小説書くの下手なのかなオレ……

次の話は、ディオスとギルダーツの戦いの横で行われていた、
もう2組の勝負を書きたいと思います。

お楽しみに！

あ、あとお気に入り登録数が20件超えていました！
ありがとうございます！

エルザ&ナッシュ&ギルダーツ&リサーナ（前書き）

さて、激しいディオス&ギルダーツの横で行われていた。
もう2組の闘いを書いていきます。

エルザ&ナツ vs ハルザ&リサーナ

エルザ&ナツ サイド

マスターに言われた通り、煙の上がっている場所まで

たどり着くと、3つの通路があった。

『A』
『D』
『E』

なぜ、A・D・Eなんだ…？

その3つの内、Aの通路はすでに塞がれていた。

どうやら、ティオスはAに入っちゃったらしい。

「ナツ、DとE、どうしに入る？」

「Eだ！」

「なぜだ？」

「だって、ハルザのEじゃないか、だからEだ！」

「なぜ、私の名前から取るんだー！」

ゴッ！とナツの頭にお見まいじてから

Eに入つていつた。

「結局、Eに入るのかよーー！」

ナツは文句を言ひながらついてきた

しばらく、歩くと、広い間に出了。

上を見ると旗があり、『鬪』と書かれていた。

「ディオスや、ギルダーツがいないとなると

私たちの相手はミラ達のようだな……」

つてことは、ディオスは……ドンマイだ……

「じゃあ、ディオスはギルダーツの所に行つちました

つてわけか」

後ろでナツが声を上げた。それを言つてやるな……

サイドエンダード

ミリ&リサーナ サイド

海岸に着くと、サタンソウルを解いた。

それにつづいて、リサーナも降りてきて、アニマルソウルを解いた。

「さ、急いでー!! 姉え！」

と、リサーナは突っ走つていつてしまつた。

「ちょー！リサーナ！」

あわてて追いかけた。

そのまま、煙の上がつてゐる所まで着くと、3つの通路の内、すでに2つは塞がれていた。他の2組に先を越されたらしい。

「Dしか残つていなか…」

それしか残つて無いなら仕方がない。Dをそのまま進むことにした。

リサーナもついてきて、しばらく歩くと広い間に出了。

上を見ると『闘』と書かれた旗があつた。

「へえ、闘か。ギルダーツじゃなくてよかつたぜ」

「セーフだね、ミラ姉え」

さて、対戦相手は誰かなあ…と田を凝らすと、

2人の影が見えてきた。

「遅かつたな、ミラ、リサーナ」

エルザの声が聞こえた。

思わず、グツッと手を握った。

「やつと、エルザをボコボコにできる口が来たよ……」

「//リ姉え……怖い……」

まあ、エルザの横にいるチビには置いてといって、

「わつわとおっぱじめよつせ、エルザ……」

「ああ、やうだな……手加減はしなこぞ//リ……」

「望むとこりだ」

そう言つと、テイクオーバーして、サタンソウルになつた。

「ぜつてえ、負けねえぞ!」

「//リ姉え、やつぱ怖いよ……」

リサーナに怖がられてるが、ここはスルーした。

サイドエンド……

「換装! 黒羽の鎧!」

エルザは換装すると、一撃の破壊力を増す『黒羽の鎧』になつた。

「//」もすでにサタンソウルになっている。

「「こくわつ！」」

エルザ、//は同時に突っ走った。

そして激突した。

「はああ！」
「だあつ！」
「ふんつ！」
「ちつ！」
「ここだ！」
「当たるか！」

今までのよつなレベルの低い闘いではなく、本気の闘いだった。

ベシッ！-ドカツ！-ゴツ！-ガツ！-バキッ！-ベシッ！

「はああ！」

「だああ！-！」

二人の拳が交差し…

ド「オツ！-！」

ほぼ同時に顔面に直撃した。

「三三三、なんせ」

「お前もな！」

「なら、さればどうかな！換装！」

」
：！
「？

「明星・光粒子の剣！」

「くつ！ ダークエクスプロージョン！！」

エルサの2本の剣から放たれた魔法と

三三の両手から放たれた魔法が激突した

ハチハチハチハチッ！！

۱۷۰

- ち い こ ！

ドゴォン！！

そのまま爆発した。

「つめ！」

「べあつ！」

そのまま一人は吹っ飛んで壁に激突した。

「「すつ」」おい…」」

お子様2人は見学状態だった。

「「つて、戦えお前達! (テメー等)」」

起き上ったエルザとミラがツツコんだ。

「「「」」めんなさい…!」」

泣きながら謝った…

その時、急に大きな爆発音がどこから響き、

地面が揺れた。

「「「」」な、なんだつ!…?」」」

4人ともビックリする。

「これって…」

「ギルダーツと…」

「ディオスの方か?」

「いったい、どんな闘いやつてるんだ?」

リサーナ、エルザ、ミラ、ナツの順で言った。

すると、揺れが収まつた。

その途端、また4人は向き合つた。

まずは、ナツとリサーナが仕掛けた。

「負けないよ！ナツ！！」

拳が交差し

トガツ！！

一五二

二二二

ドサツ：2人同時に気絶：

その光景にエルザ、ミラがツッコんだ。

「……」

「「私たちかーーつ！ーー！」」

それで納得かい！？

「換装！天輪の鎧！」

エルザは天輪の鎧へと換装した。

「絶対に勝つ！エルザア！！」

両手に闇の球を作りだしたミラ。全魔力を放つようだ。

循環の「」

—ソウル…

劍！

「イクスティイクタア―――！！」

回転する多数の剣と闇の波動がぶつかりあつた。

そして
…

ガギギギギギギギギギギギギツ ! ! !

エルザの技が闇の波動を切り裂いて、

ミラに直撃した。

「な……に……魔……法……を……」

宙を舞いながら、サタンソウルが解けた。

「ひやひや、//ラも氣絶したよつだ。

ズザアア…

「ハア…ハア…私の…勝ちだ…//」

勝者…エルザ&ナツは勝つたのか？

「ナツ！いいかげんに起きる…！」

「ゴッ…！」

「あやあ…！」

頭に大きなたんじぶを作りながらナツが起きた。

「あれ…エルザ…勝つたんだ…」

「ハア…」

先が思つやうれる…。

と、その時、急にまた地面が揺れだした。

しかも、今度は長くて大きい。

「な…なに、コレ…？」

ナツが絶句している。

理由はすぐに分かった。

「魔力だ…。それも、とんでもない大きさのな…」

「じゃあ…ギルダーツの?」

あのオヤジ以外考えられなかつた。

「まだ、続いていたのか、ディオスとギルダーツは…」

あのギルダーツに、ここまで持ちこたえるなんて
もしかしするとディオスも化け物なのかもしれない。
そして、しばらくすると、揺れが収まつた。

「終わった…のかな?」

ナツが聞いてきた。

「分からぬ…とりあえず、先に進もう。道も開いてるしな

」
そつ言つて、エルザはスタスタ歩きだした。

「あー待てよおーー!」

ナツもあわてて追いかけた。

さて、この後は一次試験だ。

いつたい、どんな試験が待ち構えているのか分からぬが、絶対、S級魔導士なつてやると思ひ、ヒルザであった。

エルザ&ナッシュ&リサーナ（後書き）

さて、二次試験は何が待っているのか…
は次回のお楽しみです（笑）

一次試験（前書き）

さて、一次試験を突破した
ディオス、エルザ、ナツ。
次は一次試験開始です！！

一次試験

エルザ&ナツ サイド

ミラ&リサーナとの激闘を終え、開いた通路を進む。すると、明るい間に出了。そして、そこには

マスターが待っていた。だが、目を凝らすと…

マスターの後ろの机に座っているディオスを発見した。

まさか…

「ふむ。勝つたのはエルザとナツか」

マスターが声を上げた。

そんなことよりも、ディオスがいる方が気になる。

「エルザ&ナツは『闘』でミラジエーン&リサーナを撃破し突破…」

「ディオスはギルダーツの試練を見事突破…」

「「嘘だ――――――? ? ?」」

ナツも同時に驚愕の声を上げた。

「では、これより一次試験を始める…！」

て、話終わりかよ！

それも休憩無し！？

そんなこんなで一次試験が始まろうとしていた。

サイドエンド

「それじゃ、一次試験の内容を説明しよう。…

まさか、この状態でエルザ、ナツと戦えって言つん

じゃねえよな…

さすがにあの時、全魔力使つたせいで…全然無いぞ…

「一次試験の内容は…フュアリー・テイル初代マスター

メイビス・ガアーミリオンの墓を探し、たどりつく事じや」

「…………え？」

オレ、エルザ、ナツが素つ頓狂な声を上げた。

「制限時間は6時間！ワシは先に墓の所に行き待ってる！では

スタートじゃ……」

と言い残し、マスターは消えた。

「どうして事だ…？」

「……………？」

オレの問いに全く意味が分からぬ表情でエルザとナツが答えた。

ん~...じゅあ、とつあ~ん~...

●不思議な回り道

「じゃあ、私は東から行こう…負けないぞディオス！」

「望むところだ！」

ゴツとオレとエルザは拳を打ち付けあうと、分かれた。

しばらくして、オレはリュックの中にいる相棒に聞いてみた。

「なあ、ラッキー……場所分からんか?」

「え、… もう… まだ… ね…」

リュックから顔だけを出して、ラッキーが答えた。

「ただ、どうかヒントがあるんじゃないかな?...」一次試験の通路

「一次試験の通路?」

「やつ。だつて通路の入り口にあつた英語つてなんかおかしかつた
じやん」

言われてみれば……

A - B - C - D - E 這樣なのに、なぜか A - D - E だつた……

「とつあえず、あの3つの通路の所に戻つてみよつよ」

「……そだな……飛ばすぞラッキー」

ラッキーに言われた通り、煙の上がつていた所まで戻る」と云つた。

オレが言つとラッキーはまたリュックの中に顔を引っ込んだ。

「しゃやく
神速!」

マッハ4の速度で数秒で煙の上がつていた場所までたどり着いた。

そして、弔いのな顔を見付け腰かけ、3つの通路をじーっと眺めて
みた。

「ヒントねえ……」

「やつ……やっぱ3分からないよ……」

ラッキーがリュックから顔を出した。

「メイビスの墓…制限時間…6時間…」

マスターの言つてこた言葉を少し思い出してみる。

すると、突然、ラッキーが声を上げた。

「あーー。」

「どうしたラッキー！？ 何か分かったのか！？」

「3時のおやつ、まだだつた！！」

「やつちかよーーーー。」

こんな時に食つ事しか考えていないラッキーに呆れた…

リコックの中からお菓子を取りだして食い始めたラッキー…

ホントよく食つよなコイツ…

すると、またラッキーが声を上げた。

「ディオス、もしかして試験の内容自体がヒントなんじゃない？」

「なぜ、やう思つんだ？」

「だって、ヒントも無じで、この島にあるメイビスの墓を探せなんて

言われたら絶対6時間以内なんて無理だよ？」

言われてみれば、確かにそうだ。

マスターはただ、6時間以内にメイビスの墓を見付けろとしか言つていない。

しかも、ラッキーの言つとおり、この島の中からメイビスの墓を見付けだせ

なんて無理な話だ。だとすると、この試験の内容自体がヒントだとしても

おかしくない…

「墓… 6時間…」

試験の内容を基にもう一度考えてみる…

その時、ラッキーが声を上げた。

「ティオス、もしかしたら『6』っていうのは文字数なんじゃないかな？」

「文字数？」

「やう。だって『墓』っていうのと『時間』をヒントだと考えてみると

いくつだって言葉が思いつくよ。」

さすが、たくさん食べているだけあって、頭の回転が早いやつだ…

栄養つてのも大事なもんだな…

「それと、『A・D・E』っていう英語…」

「いやあ、べてから考へると、『墓』と『時間』から考へられる言葉を

英語にしたと、『6文字』になるのを探せつてことだよ」

「ラッキー…」

オレは氣づかぬうちに声を上げていた。

「やつ…」

「…やっぱ、お前と組んで正解だつたぜ…」

「やつ…」

ホントにやつ思つた。まさか、こいつがこんなにも頑良かつた

とは思わなかつた。

「あ…」

その時、ラッキーが声を上げた。

「どうしたラッキー？ つに分かつたか？」

「えへ。あつたよ……墓、時間から思こめたる薙葉で、英語に直すと

6 文書にならねりが…」

「すばえじやねえか! リシ キー…」

まさか… じぶんに早く思つてなんて思わなかつた。

「あの薙葉つてこのひのせな…『終焉』…つまり『死』だ

か…」

「 だえミ.ト.ミ.カ… つて書は…」

だえミ.ト.ミ.カ… じの中に『ロ』と『エ』が今までじる…それに

『E』だけは他のアルファベットと比べて2回使われてこの仲間はずれ…

そして3つの通路のA - D - E…

わつ、答えは決まつた!

「 『E』は、『E』の通路だ…」

オレとリシ キーは同時に頭を上げていた。

「 もうと決まつたや、行くかー! リシ キー…」

「 もう…」

ラツキーは急いでリュックの中に入った。

そして、オレはそのリュックを背負つて、Eの通路に入つて行つた。
中に入ると、ミラとリサーナがいた。リサーナは頬のキズ以外ほと
んど

無いが、ミラはひどいケガだ。

「ミラ…大丈夫か?」

駆け寄つて、声を上げた。

「……ディオス? なぜこんな感じ? つ…」

「しゃべるな! 今、治療する!」

体質を『天竜』に変更……魔力は休んでいる間にかなり回復した

ミラに両手をかざすと、治癒魔法を使つた。

「キ…キズが…」

ミラの体にあつたキズがどんどん癒えていく…

そして、しばらくすると完全に消えた。

「……ふう…やっぱ治癒魔法は魔力半端無えや…」

回復した魔力もまた、空に近くなつた。

「…すまない…『ディオス…』

「…」

ミラが「んな」と言つなんて思いもよらなかつた。

「しかし、『ディオス、なんでこんなとこに来たんだ?』

「あ…ああ、オレ、今、一次試験やつてるとこで、その一次試験の

答えが分かつたから、向かつてゐ所だつたんだ」

「なに――――――?」

ミラがすんげえビックリした…。

「じゃあ、お…お前…あのオヤジの試験…突破したのか…?」

「あ…ああ…」

結果は大敗なんだけどな…

しばらく、ビックリした表情のミラだつたが、すぐに元に戻つた。

「あ…ビックリした…。まあ、いいや。とりあえず助かつたディオス…

試験の途中なんだろ?…行つてくれ

「ああ…氣をつけて船に戻れよミラ…」

そう言つと、オレはまた進んで行つた。

「…ナツみてえにかわいい奴だけ…こことこりあるもんだな…」

ディオスの後ろ姿を見ながら、ボソリとつぶやく//リマアリアであった。

「治癒魔法でだいぶ魔力減つちまつた…『神速』はまだ使えねえな

…」

走りながら、ディオスは自分の魔力の状態を確認していた。

しかし、オレって魔力無さ過ぎだろ…

そう思つていると、一次試験の開始場所に出た。

すると、あることに気付いた。

開始直後は何も無かつたのに、今はなぜかアルファベットが並んでいた。

左『A』
中『D』
右『E』

…『じー寧な事で…

そつ思いながらEの通路を進んだ。

ほとんどまつすぐな道だったので迷う事は無かつた。

数十分くらい走り続けると、いつの間にか島の中央にある大きな樹の

すぐそばまで来ていた。確か、マスターは『天狼樹』と

言っていた。改めて見ると、その大きさがよくわかる。

そうして、走つて走つて走り続けると、ようやく広い間に出了。

もう、天狼樹の根元だ。そして…

「なんと…先にたどり着いたのはディオスじゃったか…！？」

藁でできたかまくらに不思議な形をした墓があり、その墓の前に

マスターが座つていた。…だけど…

「呑気のに酒飲んでんなよ…！」

思わずツッコんだ。

「まあ、堅い事を言わない言わない」

頼れるマスターだけ…」いつの見ると呆れちゃつわ…

「とりあえず…一次試験クリアじゃ…そして」

「S級魔導士昇格試験合格、じやー」

思わず両手を握りしめ…

「… ゆひしゃ――――――――――――

と叫んでいた。マジで嬉しかった。

この試験の出場者の中に選ばれた時も嬉しかったが、

それ以上だった。

マスターも微笑んでいた。

すると、その微笑みも消え、真剣な表情になった。

「では、S級魔導士になる事と… お主のその力、心、魂… 全てを見込んで…

お主に、ある『魔法』を授ける…」

…………なんですか…?»

「ある… 魔法…?»

「つむ… その魔法の名は… 『妖精の法律』…」

「フニアリー… 口づ…」

聞いたことの無い魔法だったが、ギルドの名を冠する魔法名だとすると

おそれく、かなり強力な魔法なのだろう…。

「フェアリー・テイル…三大魔法の一つ…超絶審判魔法『フェアリーロウ』」

「ギルドの三大魔法…？」

思わず驚いた。

「今から、お主に見せよう…」

そう言つと、マスターは両手を胸の前に持つてきた。

不思議な構えだ。

すると、その両手の間に球ができた。恐ろしいほど

魔力が詰まつた球だ。

そして、両手を合わせた。

すると、いつの間にか空に集まつていた雲の中央にポツカリと穴が開き、魔法陣ができた。その魔法陣の中心にはフェアリー・テイルの紋章が

ある。そして、天狼島全体が優しい光に包まれた。眩しかつたが、とても

暖かい光だった…。そして、徐々に光は薄れていき、空も元に戻つた。

すると、マスターが口を開けた。

「『』の魔法はな……術者が敵と認識した者だけを討つ魔法なのじや」

な……なんて強力な魔法……

つまり、マスターがオレを敵と認識していたら、オレは……逝つてたのか……

「では、手を貸しなわい……」

言われた通り手を差し出すと、握られた。

その途端、何がが手からオレの中に流れ込んでくるかの様な感覚がし、

全身が震えた。

「がつ……ぐつ……」

数秒、恐ろしそうほどの苦しみに耐え、手が離されると、その苦しみも消えた……

「お主なら、この魔法を正しい方向に扱えると信じておる……

これからも、よろしく頼むぞ、『ティオス……』

「……はい……」

こいつの間にか声がかされていた。

「では、戻るかの……ギルギリ……おうとその前……」

「「ティオスよ、そこにあるのがメイビス・ヴァーリコカンの墓……

お参つしておきなさい……」

「わかりました……」

言われた通り、メイビスの墓の前まで行き、両手を合わせ、目を開じた。

しばらくしてから、目を開けた。

すると、一瞬だけ、少女の姿がチラシと見えたような気がした。

瞬きをして、よく見てみる……。

だが、特に変わった様子は無かった。

「（氣のせい……なのかな……）」

……ナウリツヒトニした。

その時、マスターの声がした。

「「いれ、何をしておる。置いてゆくべや。」

ひでえーーー! これがホントにマスターかよーー?!

思はず、そう思つてしまつた『イオス』であつた。

その後、船の前で信号弾を上げて、エルザ、ナツ、ミラ、リサーナも集まつた。エルザ、ナツ、ミラ、リサーナはオレがS級魔導士になつた事を聞くと、

「ええええええええええええええ」

と、アゴが地面まで落ちた。その様子を見て思わず吹いた。

そして、そのまま船に乗つて、ギルドに戻つた。

船の中ではエルザとミラはS級になれなかつた事を

リサーナは「うを励ましていたが、あまり効果はなかつた。
す「」く落ち込んでいて、ナツは酔つて、それどころではなかつた。

落ち込みながら「」はオレをジトーッと見ていたが… オレ

何かしたのか？

ラッキーはと言つと、呑氣に肉食つてゐる。

ホント、なんで肉なんだ？

そんな様子を楽しみながら、ギルドへと戻った。

ギルドの中でも、オレが△級になつたのを知ると

1

と全員のアゴが地面に激突した。数時間前にも見た気がする。

その後、ギルドの2階へと案内されたり、S級クエストの説明を受けたり

と忙しかつたが、今はS級になれた事を素直に喜びたかった。

一次試験（後書き）

無事、一次試験をクリアしたティオス。

え？ 試験の内容が原作と全然変わらなくてつまらない？

……そこは勘弁して下さい……

リサーナ死す（前書き）

S級魔導士になり、3年経過した…といつ設定。3年の間に、エルザとミラもS級になりました。

リサーナ…死す…

S級になつてから3年が経過した…

オレは14歳になり、かなり身長も伸び、
体もたくましくなつてきた。

エルザとミラもS級になつてゐる。

そして、新しく、ミストガンという男も入り、S級になつた。
顔を隠しているため、見てみたいたな、と時々思つてしまつ。
ナツも、あの時と比べればものすく成長していく、魔力も
かなり高いが… まだまだだ。

めずらしく、グレイと喧嘩しておらず、リサーナと楽しそうに
話している。なんか、良く見るとお似合の二人だ。

そういえば、少し前に知つた事だが、リサーナは、オレとナツの
1歳上らしい。S級の時はまだ、子供だったが、たつた3年で、
もう大人じゃないかと思つほどの性格になつた。思つが、このギル
のド

女はスタイル良すぞじゃないか？

ミラの弟でリサーナの兄にあたる、ヘルフマンはこつものよつて学
ランだ。

どひゅう一六歳らしいが、勉強が嫌いらしい…

そんな様子を、ラッキーと一緒に肉を食いながら、見ていたが、今
田は

なんか、嫌な気分だつた…

そつ…なんか不吉な事が起つたやうな予感がしてたまらなかつた。

そんなことを考えていたと、ミラが声を上げた。

「おーい… ヘルフマン、リサーナ、クエスト行くぞー…！」

と、S級クエストの依頼書を持ちながら言った。どひゅう、近頃、

この近辺に現れる『ザ・ベース』といつのを討伐してほしことつ

依頼らしい。

「わかつたよ、姉えちやん」

とヘルフマンが準備をし、

「はーい、ミラ姉え」

とリサーナは最初から準備をしていたらしい。

そして、エルフマンが準備を終え、こび、出発とこの時、ナツが声を上げた。

「おー、リサーナ、オレも連れてつてくれよ……」

どうやら、一緒に行きたいらしい。

だが、リサーナは

「ダメ。……いくらミラ姉えがS級でも、3人は守りきれないよ」

と言った。確かに、その通りだ。2人ならともかく、3人を守るとなると、

かなり難しい。それにミラは1年前にS級になつたばかりだ。

「いいよお……自分の命は自分で守るからさあ……」

どうやら、ナツはどこも行きたいらしい。

「ダメって言つたらダメ」

リサーナも譲らないらしい。

ホント見てて思うが、めっちゃお似合いな2人だ。コイツら……

「だけどね……」

そこで、リサーナは口を開けた。

「もし、今後、ナツがS級になる時が来たら、パートナーになつてあげてもいいよ…」

「…お…」

「…お…」

「うやうや、ナツは納得したらしい。」

といふか、そんなんで納得するんかい。

「じゃあ…いってきます！」

トリサーナは言つて、右手を上げて、人差し指を突きあげた。

それを見たナツも笑つて、同じように人差し指を上げた。

すると、リサーナはミラとエルフマンの後を追つていって、姿が

見えなくなつた。

だが、この時、オレは激しく後悔した…。もし、オレが一緒に行つてたら、

あんな結果にならなかつたかも知れない…と

そして、その時はやつてきた…

日が落ち、それを暗くなつてきた時、ギルドの扉が大きな音を立てて開き、

メンバーの一人が息を切らしながら、戻ってきた。

そして、声を上げた。

「た……大変だ……ミラ達が……」

その話を聞いた途端、オレとナツは急いで、その男の所に近づき、詳細を聞いた。

「なんだ!? 何があつた! ?」

「ハア……エルフマンが……ミラ達を^{せんしんティックオーバー}『ザ・ビースト』を……

全身^{せんしん}接収したんだ……だけど失敗して……そのまま……

暴走し始めたんだ……」

それを聞いた途端、オレは眉間を感じた、不吉な予感が的中したとすぐを感じた。

「場所は! ! ? 今、ミラ達はどうしている! ?」

ナツが声を荒げた。

「ハア……東の……荒れた岩場……近くに森がある所だ……」

それを聞いた途端、オレはナツに声をかけた。

「ナツ！掘まれ！すぐに行くぞーー！」

「あーーー！」

ナツはオレの右手をしつかりとつかんだ。

それを確認すると、オレは『神速』^{じんく}を使った。

3年間に『神速』の早さはマツハ6ほどにまでなっていた。

ズバアーン！…という大気を揺るがす大音響を出して突っ走り、東に向かった。

そして、数分で目的の岩場にたどり着き、ミリ達を探した。

そして、見つけた。体全体にキズがあつて苦戦しているミリと、そのミリに

駆け寄るリサーナ。そして、その後ろには…

以前の面影など全く無くした、獣化したエルフマンがいた。右目の下の傷が無ければ

エルフマンに思えない。

その時、リサーナが、エルフマンの前に出た。

バカ！何を考えている…！

何かを言つてゐるようだつたが、辺りの風がうるやくて聞こえない……

その時、エルフマンが右手を上げた…攻撃の構えだ！

「リサーナ！！」

その時、横にいたナツが速度を上げた。

間に合うか？『神速！』

また、大気を揺るがす大音響を上げて、突っ走った。

だが、無情にもエルフマンの右手は振りあらされ、

リサーナを森の彼方へ吹き飛ばした……

時間が停止したかのようだつた。

リサード・ガード

ナツミラが声を上げた。

そして、オレは先ほどまで、リサーナがいた所にたどり着き

突つ立つたままだつた。

何とか気を保つて、口を開けて、声を出した。

「……ナシ……リハ……ツサー……ナの所に行つててくれ……」

「「……！？」

「早く行つてくれ……！オレはエルフマンを食つ止める……！」

「だけど……あんた一人じゃ……」

「こんな奴、オレ一人で十分だ！……」

オレは氣づかぬ間に声を荒げていた。

ミラとナツが少し驚いたが、すぐに戻つた。

「……分かつた……エルフマン……任せたよ……！」

そう言つと、ミラは森の中へ入つて行つた。

「ティオス……死ぬなよ……！……」

ナツも続いて入つて行つた。

それを確認すると、エルフマンの方を向いた。

「……完全に……暴走してゐるな……」

もはや、理性など微塵も残つていないと判断した。

「……お前……今、ぶつ飛ばした奴……誰だか分かつてんのか？」

つたく……何を聞いてるんだオレは？……理性もない奴に話しかけて

どつかる。

「妹だよ……お前のな……リサーナだよ……」

その時、また、右手を振り上げたエルフマン。

「……お前は……」

そして、その右手がオレに向かつて振り下ろされた。

「お前は……！」

オレは、その攻撃を『左腕だけ』で受け止めた。

足が地面にめり込み、クレーターができた。

そして、オレは左手でエルフマンの右腕を掴んだ。

そのまま、握りつぶすかのよつな勢いで力を込める。

「お前は……自分の妹を！家族を！傷つけたんだぞーーー！」

左手だけで、エルフマンの体を持ち上げ、思いつきり、放り投げた。

「グオオオオオオツ！ーーー！」

雄叫びを上げながら、吹っ飛んでいく。

そのまま200mは吹っ飛んだか……

だが、そんなことほ気にも留めてなかつた。

「だああああああつ！……」

『神速』でエルフマンの近くまで行くと……

「神龍の……鉄拳……！」

「ドゴオツ！」

「鉤爪……！」

「バキイツ……！」

「翼撃……！」

「ドツゴオツ……！」

「碎牙……！」

「ベキイツ……！」

と、滅竜魔法を次々と打ちこんだ。

痛みで、さりに雄叫びを上げてゐるエルフマンだったが、攻撃はやめなかつた。

「オレは……！……昔……絶対に……『仲間を守る、絶対に死なせない』と自分自身に約束した……！」

殴り続けながら、聞こえていないと分かっていても、オレは声を上げていた。

「ドゴツ……ガツ……ゴツ……ベシイツ……！」

「約束したああ……！……！」

「ドゴオオツ……！」

全力の『神龍の鉄拳』でエルフマンの体を撃ち上げた。

「神竜の……！」

そのまま、息を思いつき吸い込んだ。

そして…

「咆哮！……」

超特大のブレスを放つた。

地面を碎くほど勢いで、エルフマンに向かっていく。

そして、そのまま全身をのみ込んでいった。

「グウオオオオオオオオオオオオツ！……！」

その途端、一番大きな雄叫びを上げて、姿が見えなくなつた。

ブレスはそのまま高く昇つて行き、見えなくなつた。

エルフマンは、かなり遠くの方で、落ちていく姿が見えた。

氣絶したようで、テイクオーバーも解け、元の姿に戻つていた。

「……神速…」

『神速』でエルフマンの落下地点のところまで行くと、受け止めた。

そして、声を上げた。

「……そ、行くか……リサーナのところ……」

ヘルフマンの体を抱き、オレも森の方に向かって行った。

森に入り、歩き続けると、ようやくリサーナのそばに座る

ナッシミツを見ついた。

ヘルフマンをおろして、近くに駆け寄る。

リサーナの田の焦点が合っていない……このままじゃ命が危ついが、

魔力は先ほどの闘いで、かなり使ってしまった……

「//リ……姉え……」

その時、リサーナが声を出した。

ものすいじ、苦しきうだつた……こんな時、何もできない自分に猛烈に

腹が立つた。

「//リ……姉え……ビ……！」

「……どうやら意識がほとんど無くなつた……」

『神速』を使つても、間に合はんか……

「……だ……リサーナ……！」

リサーナの手を握りしめて、ミラが声をかける。

すると、リサーナがミラの方を見た。

その顔は……笑っていた……

「ミラ姉え……」

リサーナがそう口にした途端、左肩にあるフェアリー・テイルの紋章が粒子になつて消え始めた。と同時に、リサーナの体もだんだん、粒子になつて消えて行く……！

どうなつているんだ……？？

「リサーナ！…どうしたんだオイ！…！」

ナツが声を上げる。

「リサーナ…！嫌だ…！消えるな…！リサーナ…！」

ミラの顔はもう涙でグシャグシャになつていた。

オレはただ、見つめることしかできない……

そして、つこに、リサーナの体が完全に粒子となつて消え去つた。

ミツが何度も連呼するが、もうコサーナの姿はどこにも無かつた…

滅多に泣く事が無いナツでさえ、その目に涙が溜まっているのが見えた。

そして思つた…結局…オレは…また、仲間を救えなかつたと…

… せつ、思つていの時、リラがオレの胸に顔をつすめてきた。

おやりく…心のよし所が欲しかったのだね!…

そして、そのままで泣き続けるリトをオレは抱き締める」としかできなかつた。いつの間にか、オレまで涙を流していだ。。

久しぶりに泣いた気がする……

その後、数分の間、ミラは泣き続けた。

その間、ずっとオレは「」を抱きしめていた。

そして、しばらくして泣き止むと「嘘うそ……」と言つて、

立ちあがつた。オレはエルフマンをまた担いで、ミリの後を

追つた。ナツはと言つて、リサーナが消えた場所で立ち廻くしていた。

今は声をかけない方が良いと判断して、ギルドに戻った。

ギルドに戻ると//リと共に、マスターに報告した。

その報告を受けると同時に、ギルド全員が一斉に涙を流して、リサーナの死を惜しんだ。そして、数日後に『遺体の無い』葬式が行われる

事になった。報告が終わると、//リは家に向かって歩き始めたが、途中で

膝を付いてしまった。駆け寄ると、また、泣いていた…

オレは少し考えると『神速』を使って、エルフマンを先に//リの家に届けた。

そして、また//リの所に戻ってきた。

そこで、また考えて、//リに背中を向けて、しゃがみこんだ。

「…乗じなよ…家まで送る…」

そういつと、//リは何とか、オレの背中にもたれかかった。

そして、オレは立ちあがると、歩き始めた。

肩が//リの涙で濡れたが、氣にも留めなかつた…

しばらく歩いて、家に着くと、1階の奥の部屋へ進んだ。

黄、よく遊びに来ることがあるから、ジジが誰の部屋だか知つていた。

部屋に入り、ミラをベッドに降ろした。そこで少し考え、今は、1人にさせておいた方が良いだろうと思ふ、ギルドへ帰ろうとした時、

腕を掴まれた。

振り向くと、ミラがガツチリ、オレの腕を掴んでいた。

すると、ミラが声を上げた。

「『めん…気持ちが…落ち着くまで…一緒にいて…』

部屋に男女2人きりと喧うのは、少し抵抗感があつたが、いつこうときは、そんなのに構つてられなかつた。

そして、結局、ミラが寝るまで、一緒にいることとした。

そのまま、數十分くらゝ、経つだらうか…？

ベッドに横になつていたミラが、目を閉じて、やつと眠つて落ちた。

びつやら、少し落ち着いたらしく…

風邪を引くとヤバいので布団をかけて、オレはミラの家を後にした。

しばらく、歩いていると、前方にナツの姿が見えた。

地面に座り込み、顔をうずめていた。

「…なんところで、何してるんだナツ？」

近寄つて声をかけた。

が、返事はなかった。

そりこえれば、数日後に葬式があることを伝えてなかつたので
伝えることにした。

「…数日後に…リサーナの葬式が行われる…場所はカルディア大
聖堂だ…」

聞こえているか分からなかつたが、そう伝えると、オレは自分の家
に戻つて行つた。

家に着くと、ベッドに横になつた。

すると、堪えていた涙が次第に溢れだした。ラッキーの方を見ると、
すでに寝ている…。

「…くそつ…」

気づかぬ間に声を上げていた…

「オレは……非力だ……！」

今回、何度もかすら分からぬ、自分の無力さに苛立ち、そして悔んだ。

そして、溢れ続ける涙を止めることができなかつた…

その後、いつ涙が止まつたのかすら知らないまま、眠りに落ちて行つた。

リサーナ死す（後書き）

さて……リサーナの死を少しあレンジして書いてみました。
もつお分かりかもしませんが、
ディオス×ミラジーノ
ナツ×リサーナ
と言つた感じで今後なつて行くと思います。

次はリサーナの『遺体の無い』葬式を書いていきます……

遺体の無い葬式（前書き）

さて、遺体の無い葬式が始まります。リサーナがいなくなつて3日後です。

遺体の無い葬式

リサーナがいなくなつて、3日後…葬式が行われた。

もちろん、あの時、リサーナの体は粒子となつて消えてしまったので
遺体は無い。なぜ、消えたのかは、原因不明…

周りを見ると、ほとんどの人が泣いていた…

だが、それは当たり前だ…ギルドの…否…家族の1人が亡くなつたの
だから…

不思議な事にミラは涙を流していなかつた。だが、エルフマンは
号泣していた…おやらく、他の誰よりもつらいだらう…

自分の妹を、あの『ザ・ビースト』を操れなかつたせいで殺してし
まつた

のだから…

ナツはと言つと、葬式に出席したには、したのだが、途中でどこか
に行つてしまつた。

…そして、オレは自分の力の無さをまだ悔んでいた…

あの時、もつと早く来ていれば…いや…不吉な予感がした時点で、
あの3人を止めて

いれば…… そう考へてゐるうちに、オレは泣いてゐるのに気が付いた……

止めようと思つても止められなかつた……

マスターが何かを語つてゐるが、ほとんど耳に入らないまま、葬式は終わつた……

マスターと、他のギルドのメンバー達はほとんど人が泣きながらギルドへ戻つて

行つた。……残つたのは、オレとエルフマンとミラだけだつた。

エルフマンはリサーナの墓の前でガクッと膝をついた。

「……オレの……オレのせい……リサーナ……は……うう……」

いや違ひ、お前のせいじゃない……オレが悪かつたんだ……

墓の前で泣いてゐるエルフマンを見ながらミラが声を上げた。

「エルフマン……あんたのせいじゃないよ……生きているものは……いつか

必ず死ぬんだ……」

「リサーナが言つてたぢゃないか……死んだものは生き返らないけど

その人の事を思つていれば、心の中ですとその人は生き続けるんだ……つて」

もういいと、また泣き狂った!!!

オレは、エルフマンに少し言いたい事があつたので口を開けた。

「エルフマン…」

1
?

「言いたくはないが…リサーナは死んだ…『これ』が現実だ…。」
ラの言った

通り、『生きているものは、いつか必ず死ぬ』。…お前は今回…//
ラモリサーナも

守れなかつた。だから、いつか、またミラに危機が訪れたら、
守つてやれ。

他のメンバーの誰かじやねえ、『強くなつたお前』が守つてやれ……

「……うん……分かつた……絶対に守る！ 今度こそ絶対に……！」

エルフマンは涙を拭つて、しつかりと答えた。

それを見ていた、ミラがまた大泣きしだして、膝をついた……

やれやれ、世話が焼ける

オレはやつ思いながら、手を差し出した。

「//」は泣きながら、その手を掴んできた。

グッと力を込めて、//を立ち上がらせた。

立ち上がったとたん、//がまたオレに抱きついてきて、そのまま胸で

泣き続けた。オレとエルフマンは顔を見合すと苦笑いした。

そのまま、泣き続ける//に付き添つて、家まで送った。

家についても、なぜか、//は一向に離れようとしなかった。

「どうしたんだ//？」

「や//…ティオスつて、やっぱ鈍感だね…」

「ちよー・チキーー・オレは言つておくが鈍感なんかじやねえぞ！」

「姉ちゃんが一向に離れたくないのを見て、何も思わない時点で

鈍感だよ…」

エルフマンが何か訳の分からぬ事を言つていた。

結局、//の家で夕飯まで食べることになってしまった…

ラッキーが大量に食べるのと、//はたくさん作った。

そういえば、料理出来たんだ…

その後、夕飯を食い終わって… ラッキーは食いすぎて寝ていたが…

お別れをし、リリの家を後にした。

見ると、もう夕焼けの時間だった…。

そういえば、ナツの事が少し気になった…

そこで『神速』を使って、ナツの向かって行った方向に移動した。

たどり着くと、夕陽がはっきりと見える丘の上だった。すげえ良い景色だ…

その丘の上には、墓でできたかまくらがあり、その前にナツとハッピーがいた。

良く見ると、ナツの前には墓があった…ナツが作ったのだろうか?

そのとき、話し声が聞こえてきた。

「ナツ… 大聖堂の方に墓があるのに、なんでここにも作るの?」

ハッピーの声だ。

それにナツが答えた。

「リサーナ… この場所から見る夕陽が大好きだったんだ… だから… リサーナが

「いつでも夕陽を見れるよ！」……「ここも作るんだ……」

その声は、涙声だった。

「……、どうやらナツとリサーナの想い出の場所らしい……」

オレはナツの所に歩み寄った。

「ナツ……」

声をかけると、ナツとハッピーが振り向いてきた。

「一人とも涙で顔がグシャグシャだな……」

「なんて顔してやがる、2人共……」

思わず笑みをこぼしてしまった。

それにつられてるようにナツも少しづつ笑顔になつてこつた。

「ああ、そろそろ、帰るぞ……」

その後……ナツとハッピーと共に丘を下りながら、あの場所の事を聞いた。

どうやら、ナツがハッピーの卵を見つけて、リサーナと共に、その卵を

温めていた場所らしい。

その思い出の場所に墓作るなんて……意外とやるじゃねえか……ナツ……

そんなこんなで、ギルドに戻つて行つた。

ギルドに戻ると「鈍感、鈍感」と、ほぼ全員が言つたが……

サッパリ分からなかつた……

遺体の無い葬式（後書き）

さて、今回は短くて済みません…

ここで、主人公の『ティオスが鈍感…』という設定にしました。

次はようやく原作へ行きます。

ルーシイあたりかな？

そういえば、リサーナは死んでませんでしたねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8326y/>

フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

2011年11月29日21時48分発行